

もない。宮様に最も古くからお付き申して居た女達は御現状の不安さにどうしても泣かないで居られないやうな悲しい聲を立てて居た。

この十一日の朝に北側の襖子二間を外して更に向ふの縁座敷へ宮様をお移し申し上げるのであつた。これは豫定のことであるから、御帳の室に御簾を掛けることも間に合はないので、几帳を幾重にも重ねて御室をお圍ひした。三人の僧が近い所でお加持をした。院源僧都は昨日出來た願文に猶また將來佛に對する大切な供養の條件などを書き加へたものを讀み上げて居るのであつたが、自分はその字句の身に沁むのと、殿様が僧達に聲を合せて佛の御名をお唱へになるのが頼もしくて、自分達の希望は繋がれて居るのであるが、悲い方の感情も固より烈しくて、

「何故こんなにお産がおむづかしいのでせう。」

などと云ひながら涙を流して居た。

「こんなに人が多勢居ては一層宮様は御氣分を悪く思召すだらうから。」

と殿様がお云ひになつて、侍女達の多くを東南の室の方へお遣りになつた。御帳の中でお附

きして居るのは殿様と奥様、讃岐と宰相と内藏の命婦、仁和寺の濟信僧都、三井寺の内供さんと、これだけである。殿様が佛の御名をお唱へになる聲にけおされて、僧の方は却て何もして居ないと思はれる程であつた。お次の室に残つて居るのは大納言さん、小少將さん、宮の内侍、中務さん、大輔の命婦、大式部さん（これは殿様が關白におなりになつた時の宣旨を取次いだ人）と自分との七人である。皆宮様とは長いお馴染を持つた人達なので、御心配を申し上げて夢中になつて歎いて居るのも尤もであると思はれた。自分はお仕へし初めてからの月日は僅であるとは云へ、心の中では今までの経験の中で現在の不安程大きい怖れを伴つたものは無いと感じて悲んで居るのである。自分達の居る後に立てた几帳の外には尙侍のお乳母の中將、三番目の姫のお乳母の少納言、末の姫様の小式部の乳母などが參つて居た。其處は細い通ひ路になつて居るのでそのためにも往來が容易でない。人に押されて自然に伴れて行かれるだけで、行き合ふ者は顔を見分ける間もない。子息方、兼隆宰相中將、雅通少將などの心安い人達はもとよりのこと、經房中將、齊信大夫などと云ふ平生それほど近しくしない人人までが、どうかすると几帳の上から自分達の座を覗いた。泣き脹らした目をした自分達は男に顔を見られて恥ぢ



ることも忘れて居た。頭の上には魔除の撒米を雪のやうに浴びて、くしやくしやになつた着物を着て居た自分達はどんなに見苦しいものであつたであらうと、其時のことを思ふと可笑しい。

宮様の前のお髪を少しお切り申して、僧から戒をお受けさせることを殿様がしておいでになる時、悲みに疲れた心はほとほと絶望の頼りなさに近い思ひをするのであつたが、若宮様はその刹那にお生れになつた。お後産の續いて起る迄、廣い本殿一體の南側の座敷から縁の欄干の傍までを埋めて居る僧俗が、力に満ちた祈りを一齊に上げるのであつた。東の座敷の方に居た侍女達の座は何時の間にか役人達と混つて、若宮様の御誕生が報ぜられた時には、小中將さんは頼定左中將さんと呆然と顔を見合せて居たと云ふことを後で近くに居る人が話して笑つた。小中將さんは始終綺麗に化粧して居る人で、この日も夜明に顔を作つて出て来て居たのであるが、目は泣き脹らし、涙で白粉が斑になつて居て、平常の小中將さんとは少しも見えなかつた。まして自分などは人から見てどんなに變妙な顔になつて居たであらう。然し其時其場合ばかりは誰も目に物が映つて居るだけで、心に感じが無くなつて居たのは仕合せなやうなことである。もう自分達が猛威を逞しくする時間は僅になつたと云ふやうに、物怪は皆自暴な勢を

見せて叫んで居た。物怪の移してある監の藏人には心髻阿闍梨、兵衛の藏人には曾素と云ふ僧、右近の藏人には法住寺の律師と云ふ風に受持ち受持ちを決めて、僧達は悪靈退散につとめて居た。宮の内侍を預つて居た智證阿闍梨は物怪に引き倒されたりなどして居るので、新たに念覺阿闍梨が補助に入つて二人で悪靈を叱つて居た。これは智證阿闍梨が凡僧なのでは無い、物怪が猛烈であるからである。宰相さんには惠光が掛りになつて居たが、一晚中大聲を出して物怪に向つたために、終ひには聲をすつかり噎らして居た。物怪を移すために選んで伴れて來た者にも、豫定通りに行かないのがあるために、僧達の方では骨折損のから騒ぎに終つた者も多い。

この日の朝日は晝の十二時に上つた氣がした。お後産をお済ませになつた中宮様もまた若宮様も御無事であらせられることが解り、然も皇子であらせられることを承ることに出來た嬉しさは何物にも譬へがたいものであつた。昨日一日を陰鬱な氣分で過し、今朝は涙におぼれて居た侍女達はほつとしたやうにそれぞれの部屋へ下つて休息した。宮様のお傍には年の行つた、こんな時の御介抱などに極めて適當らしく見える女達ばかりがお付き申して居た。

殿様も奥様も御自身方のお居間の方へおいでになつて、これまで幾十日か御祈禱や讀經のた



めにこの土御門殿へ詰めて居た僧達、または昨日から今日へかけて俄にお呼び寄せになつた僧達に、それぞれの布施を出す指圖をなすつたり、醫師、陰陽師としてお産に力をお盡し申し上げた人人への贈物をなすつたりした。今頃宮中では皇子御降誕に就いて、御用の掛員達が人選されて居ることであらうと思はれた。

侍女達の部屋部屋へは實家の使らしい者に由つて大きな包や袋の持ち込まれることが頻繁であつた。唐衣や刺繡を置かせた裳、それから刺繡やはめこみ細工をうるさい程させた裾帶などを、人の見ぬやうに隠しながら、

「扇がまだ來ない。」

こんなことを皆云つて、そしてお化粧に念を入れて居た。

自分の部屋から本殿を見ると、妻戸の前には齋信中宮大夫、懷平東宮大夫その他の高官が集つて居た。殿様も縁へ出ておいでになつて、幾日か掃除に手の届かなかつた庭の小流を綺麗にする指圖などを侍にしておいでになつた。誰も誰も嬉し相であつた。心の中に苦痛があつてもこの大きな喜びの前では其れを思つてはならないと云ふことを誰も知つて居るらしく人人の顔

が眺められる。中にも齋信大夫は何も特別にはしやいでは居るのでは無いが、他に勝つて嬉しい色が眉宇の間に窺はれるのはさもあるべきことである。兼隆中將は俊賢中納言と東御殿の縁で戯れて居た。

若宮へ御劍をお遣しになる陛下の御使が來た。頼定頭中將である。今日は伊勢の神宮へ参向した奉幣使が宮中へ歸著する日であつたので、御劍の使をして御産殿の穢れに觸れた中將は昇殿が出来ない。それで庭上から御母子の宮の御無事な御有様を奏上した。御下賜の品も庭上で下された。これは人から聞いたことを書いて置くのである。

若宮の御臍の緒をお断ちする役は奥様がなされた。お乳附は橘三位がした。お乳母はもとからお仕へする侍女の中から選べば氣心が知れて使ひよいと云ふ思召で人選がされた。大左衛門備中守宗時の女の藏人の辨、この二人を先づその人とお決めになつた。六時にお初湯が初まるさうである。灯點し頃に中宮職に附屬した下部が緑色の服の上に白い袍を著てお湯を昇いで参つた。その桶の据ゑられてある臺などには皆白い蔽があつた。尾張守近光と中宮職の侍長の仲信が來て其れをお湯殿の御簾際まで運んだ。其處にはもとから二つの置棚が据ゑられてあ



つた。清子の命婦と播磨とが湯に水を交せて加減をした。侍女の大木工と右馬がそれを十六の甕へ汲み分けた。羅の上著にかとり絹の裳と唐衣を付けて釵子が挿され、白元結で髪が結び上げられてあつた。その頭つきが殊にいい感じてあつた。湯に入れ奉るのは宰相さんの役であつた。大納言さんは助手である。この二人が腰に一枚の單衣を巻いた姿は珍しくて面白い形であつた。若宮様は殿様に抱かれてお出になつた。御劍の役は小少將さんで、宮の内侍は虎頭を持つて前行を勤めるのであつた。この人は松實の模様の唐衣に、大波の染模様と同じやうにした織込模様の裳を着けて居た。裙帯は羅に唐草の刺繍をしたものである。小少將さんの裙帯は秋草の間間に蝶や鳥を銀で入れたものである。唐衣は制を破ることが出来ないために、せめて裙帯だけに凝つたことが行はれるのであらう。お二人の子息と奥様の甥の雅通少將とが、魔除けの撒米を面白がつて投げたおいでになつた。誰よりも高く撒かうと競つておいでになるのである。遍昭寺の僧都は護身僧として侍して居るのであつたが、頭や目に米の散つて來るのを迷惑がつて、扇を擴げて居るのを若い公達が笑つた。文章博士の廣業が縁側の高欄の傍に立つて史記の第一巻を讀んで居た。魔障を威嚇するために弓の弦打を勤める役人は二十人であつた。そ

の中の十人は五位で、十人は六位である。二列に並んで庭に立つて居た。

夜中の御入湯の時には行はれた儀式も前の通りである。ただ文章博士だけが別の人であつた。

伊勢守致時博士の用ひたのは古例通りの孝經であつたらしい。もう一人の大江舉周博士は史記の文帝の卷を讀んだらしい。

七日の間はお座敷の内が産養をする主催者の手でその度毎に裝飾變へをされたが、色彩としては白以外に何も使用されないで、其處に白い装束で居る侍女達を眺めて居ると、全體が墨繪のやうで、黒い髪だけを上から附けたものやうに思はれるのであつた。常でさへも人に見られることを恥かしく思ふ自分には唯唯晴れがましくて、あらばかりを見られる氣のするために、晝間はあまり御前へ參らないで居た。それで閑暇なために東御殿に部屋を持つて居る人達の御前へ上つて行く姿などを眺めて楽しんで居た。禁制の服を用ひることが許されてある人人は襦珍機ものの唐衣、それと同じ地質の小桂などを著て居るので、どの人もどの人も莊重な所が同じやうに見えるだけで、個人個人の好みなどはつきりと見分けられない。まだ禁制の服の許されない人人でも中年の女になると、見る者の方に厭な氣を起させるやうな馬鹿馬鹿しい衣



裳ごのみをした跡が見えない。唯だ極めて好い三重機、五重機の織物の袴を着て、唐衣は制通りの平絹を使ひ、下の重ねに綾や羅を用いた人もある。こんな人達は扇なども外見を質素に作つた立派な物を持つて居た。譬へば皇子御降誕にふさはしい史記の文章などを書家に書かせてあるのである。この史記の句の書かれた扇を云ひ合せたやうに持つ人の多いのを見て、同じ年頃の人には共通の趣味があつて、自發的に皆それが表現されたのであらうと自分は面白く思つた。これに由つて、また人に劣るまいとする心は誰にもあるものであると云ふことも思はれるのであつた。裳や唐衣に刺繡をすることは珍しいことでも無くなつたが、袖口へも金糸や銀糸を置き、裳の縫目に銀糸を飾りしつけのやうに置いたり、金銀の薄を綾の置模様にしたたりしたのを若い侍女達は皆用ひて居た。また雪の降り積つた山に上つた月のやうにきらきらしく見えるものは華奢を盡したその人人の扇であつた。

三日目の夜は大夫以下の中宮職の諸員から産養が奉られた。齋信大夫は中宮様の御膳を受持つて調進したのである。沈の木の二重膳や銀の皿が器具として使はれてあつたらしい。くはしくは知らない。俊賢、實成の亮、權亮は大宮のお召物、若宮のお召物と分擔して衣櫃、中包の

切れ、上の覆ひの切れ、臺の机と白づくめの物ではあるが各の個性を見せた美事な品を奉つた。濟政大進はまた宴席に就いての一切を引受けて居たらしい。東御殿の西表の縁座敷が來賓の高官の席で、北を上にして、二列に並べられたのであつた。同じ御殿の南座敷の並役人の席は西が上席になつて居た。白綾張の屏風を中央の室の御簾の廻りへ外向きに立て並べてあつた。

五日目の夜には殿様のお産養があつた。丁度満月の明るい夜であつたが、池に近い處の木立の中などには篝が焚かれた。庭のあちこちに辨當を分けて與へられる所が出來、數多い小役人がそれに舌鼓を打ちながらお饒舌をして居る聲も、今夜の趣をつくる一つであるやうに聞かれた。庭を監督して居る侍達が始終不都合の無いやうにと氣配りをして其處等を歩いて居るのも夜のことと思はれないで、晝間の光景のやうである。山の横とか木の蔭とかに幾つも幾つもある大きな石の塊を拵へたやうに高官達の隨身とか供侍とかが嬉嬉として語つて居ることも、今度のやうな喜びは自分等の積年の希望が實現されたに外ならないのであると云ふやうなことから思はれた。まして家職の人人では、誰それと人から認められても居ないやうな五位ぐらゐの者さへも、腰を低く會釋して忙しさに邸内をあちこちと駆け廻りながら、理想にして居た日が



俄に到來したと云ふ得意さを見せて居るのであつた。

中宮様に供へられるために、侍女八人が白い装束に、白元結で髪を結び上げて、白い高膳を手に手に持つて出た。今夜の御前まかなひは宮の内侍である。勝れて好い姿を持つたこの人は髪を結つて一層見映のするやうになつた。扇に隠し餘された横顔が非常に美しい。禮装した八人の侍女の名は、

源式部、小左衛門、小兵衛、大輔、大右馬、小右馬、小兵部、小木工。

等である。皆若くて容貌の好い人ばかりであつた。向ひ合つて坐つた時にまことに好い感じがした。平生はお給仕をする人が順番で、變る變る髪を結つて勤めるのであるが、こんな折からであるために、八人を美貌本位でお採りになつたのを、選に洩れた人などが口惜しく悲しいと云つて泣いて妬んだことを自分は知つて居た。またお居間の東に竝んだ座敷二室に三十人餘り居た侍女達の身姿は人目を引くものであつた。二度目の御膳は采女等がさし上げた。お居間の戸口の方で、若宮の御湯殿に使はれる室との隔てに置いた屏風の前へ南向きに白の置棚が据ゑられ、その上へお肴類が皆並べられてあつた。

夜が更けるに随つて月はますます冴えて行つた。采女、典水、御髪結、典掃、それから役目の一寸見分け難い女官、多分典閣と云はれる人達であらう。これらの人人は顔の化粧を粗末にして、澤山の簪を公式の禮装をそれで現したやうに挿して、東の細御殿から正殿の通ひ口へかけて充満に竝んで居るので、侍女達は用があつても自分の部屋へ行くことも出来ないのである。宮様のお食事が済んだので、侍女達はお居間の御簾の外へ出て竝んだ。火影できらきらしくその人達の見渡される中にも、大式部さんの裳と唐衣に小鹽山の小松原の刺繡の置かれたのが面白く思はれた。大式部は陸奥守の妻で殿様の宣旨の役を勤めた人である。大輔の命婦は唐衣へは何の技巧も用ひずに、裳に銀の泥で鮮かに波の模様を置いてあるのが、人目を引くことの少いだけにおとなしい良い好みであると思はれた。辨の内侍の裳の銀の磯模様の上に、細工物で鶴を置いたのが珍しく見られた。唐衣の刺繡に松の枝を使つてあるのにも此人の好みの平凡で無いことが思はれた。上に書いた人人に比べて劣る少將さんの銀の薄の置かれた装束を女達は目引き袖引きして譏つた。少將さんと云ふのは信濃守祐光の妹で、奥様に長くお使はれした人である。



この晩の御前の有様は誰にも見せて置きたいやうな氣のするものであつた。それで夜詰の僧の席に圍つた屏風をそつと開けて、外を覗かせて、

「人間世間ではこの上美くしいものは無いでせう。」

と自分が云ふと、僧達は口口に

「ああ御結構なこと、御結構なこと。」

と云つて、本尊のおいでにならない方であるのに手を擦り合せて喜んだ。

來賓の高官達は皆東御殿の席から立つて細御殿の縁へ來て居た。殿様もその人人と一處に双六を打つて興じておいでになつた。そして誰も賭物の紙を子供らしく争つた。歌もその人人の間に詠まれた。侍女達の中へ杯の廻つた時、自分達もお祝ひの意をどう現はして述べようかと工夫した。

珍しき光さしそふ杯はもちながらこそ千代もめぐらめ

聽かれる人が公任大納言であつたので、歌はもとよりのこと、聲の出しやうなども無難に仕

おはせるとは思へない。あなたがその役をして欲しいと各が責任を譲り合つて争つて居たが大納言は外に心を取られることの多かつたために、歌を詠めと云ふ特別な條件付きの杯を私達の中へささないでしまつた。高官達への贈物は女の唐衣と裳に猶また宮様のお召、若宮様のお召が添へられたやうであつた。四位の役人には袷が一襲ね、六位には袴であつた。

その次の日はまた月が佳くて、いかにも秋の末らしい心もちの味はれる夜であつた。若い侍女達は船に乗つて池で遊んだ。思ひ思ひの服装をして居る時よりも、同じ白に揃つたのは、姿にも髪にも人人の特質を多く見せるものであると見られた。小大夫、源式部、宮城の侍従、五節の辨、右近、小兵衛、小衛門、右馬、やすらひ、伊勢人などで、この女達が縁近い所へ出て居たのを、經房左中將と若様の教通さんが勧めて伴れ出したのである。兼隆右中將が棹取役をして居た。厭がつて後へ残つた女達も羨まないでは居られないであらうと云ふ風に公達は御殿の方を見て居るのであつた。白白とした庭に月の光を露はに浴びた若い女の姿の置かれたのが面白いと自分は思つた。

北の御門へ車が幾臺も著いたと云ふ者のあつたのは、宮中から高等女官達の參つたことであ



つた。藤三位が長上で、侍従の命婦、藤少將の命婦、右馬の命婦、左近の命婦、筑前の命婦、近江の命婦と、これだけであると云ふことであつたが、自分には馴染のない女官達であるから名に間違ひがあるかも知れない。船に居た人達は周章て上つて來た。殿様は伺候した女官達の相手をしておいでになつたが、いかにも愉快さうに、氣輕く口をきいておいでになつた。女官達はいろいろな贈物を頂いて歸つた。

七日目には朝廷からお産養があるのであつた。道雅少將が勅使で、御下賜の品のいろいろを書かれた目録を入れた柳笥などを持つて參つた。中宮様は程なくお返しの手紙をお渡しになつた。藤氏の大學である勸學院の學生が並んでお庭へ來た。これは五日目にもあつたことであるが、今夜もまた皇子に見參の詞と云ふものを讀み上げた。御挨拶が下されてから御下賜品を頂いて學生達は歸つた。今夜のことは公式として行はれたのであるから萬事に嚴しさが添つて居た。

自分がお居間の御帳の中を覗くと、この大仕懸な儀式で未來の帝王の御母とならせられたことを祝はれておいでになる尊嚴な方がこれであると思はれない中宮様がおいでになつた。お

産の時の御苦痛の爲に少しお顔が瘦せて、横になつておいでになる御様子には、常よりもお若若しく、お小く優しいと云ふ感じが多いやうに思はれた。燈籠の小さいのが懸けられてあるので中が明るいのである。中宮様のお肌の色のお美しくしさは何處迄お白いのであらうと思はれた。豊かにおありになるお髪は、假に束ねると一層お豊かにお見えになるものであると、こんなことも自分には思はれた。美しい人を寫すために中宮様をお引き合にお出することは申し譯のないことであるから、もう書きません。

今夜も總てお五日目通りの事が行はれた。今日は人人への贈物がお居間の御簾から出された。高官達にはまた唐衣と裳に宮様のお召の添へられたものであつた。並役人の方は二人の頭の中將が出たあとに續いて皆が頂き物を取りに來た。宮中から御下賜品として參つてあつたのは男子用の桂、薄蒲團、細卷の絹などであつた。何れ古例のあつて遊ばされたことなのであらう。若宮のお乳附を勤めた橘三位へのお贈物は古例通りの女裝束であつたが、厚織物の細長が添へられ、銀の衣箱に入れられてあつた。それを包んだ切地はやはり白であつたであらう。外にもまだ包みにした御下賜品があつたと人は云つて居た。自分はくはしいことを知らない。



八日目から侍女達は白を脱いで常の色の服装をした。

九日目の夜は頼通東宮權大夫が産養を奉つた。献上の品物は白い一つの置棚に竝べられてあつた。この日の儀式は飽くまで華やかであつた。銀の衣箱に波や蓬萊の島の彫まれてあつたりすることは、こんな御慶事に人のしないことでは無いが、製作の巧妙と美しくしさとは他で見ることの出来ないものであつた。其れが今目前に置かれて無いために細かな記述をすることの出来ないと云ふのは遺憾である。今夜はお七夜までと違ひ、朽木形の普通の色の几帳が掛けられて、侍女達が紅の濃い色の糊打ものの上著を着て居たのは珍しくて好い感じがした。その上に羅の唐衣を着て揃つて竝んで居た爲に女達の容姿もまた際立つて綺麗に見えるのであつた。小馬さんと云ふ人が失策をしたのはこの晩のことである。

十月の十日過ぎまでも中宮様は御帳の中にばかりおいでになつた。自分は西の方に當る近所に夜も晝も侍して居た。殿様は夜中でも、まだ暗い夜明にでも若宮様のことをお思ひになると、其お居間にじつとしておいでになれないのであつた。さうして乳母の處にお寝みになる若宮様を不意に覗きにおいでになるので、よく寝入つたりして居る時に乳母の狼狽することのあ

るのも可笑しかつた。殿様がまだ何もお解りにならない若宮様を、自身の顔の前へお抱き上げになつて一人で嬉しがつておいでになるのを拜見すると、御尤もなことである、自然なことであると自分などは感じられるのであつた。また時には殿様の召物を若宮様がお汚しになるやうなこともあるのを、そんな時に殿様は直ぐに上著を脱いで、几帳の後で火に乾したりなさるのであつた。

「ほんとうにこの若宮様のおしつこで濡れるのは嬉しいことだ。かうして濡れたのを焙つて居ると自分の願ひのかなつたことが思はれるよ。」

などと悦んでおいでになつた。中務卿具平親王と殿様が親密になされたり、殿様が親王様のおためによくお盡しになつたりなされることは、かうした若宮様の擁護者になるに適當な方とお思ひになる所が豫ねてあつたのであらう。御外祖父としての愛情の大きさが事に觸れて見られるごとに自分はさう思ふのであつた。

行幸が近づくると云つて御殿廻り、庭廻りに手入れを多くして居た。澤山の佳い菊の株が他から移された。白菊の盛りが過ぎて、薄紅や、薄紫がかつたのや、黄の勝れた菊のさまざま混ぜ



て植ゑられたのが、朝霧を通して見える時の美しさは、傳説通りに此花のために老が忘れられるであらうと思はれる程である。まして自分の憂悶が人並のものであつたなら、この家の中に混つて居ると云ふことだけで容易に慰められて、浮浮と若やいで暮せるであらうと思はれるのである。立流なこと、面白いことを見聞きしても、忘れ得ない悲哀に引かれる心の方が強いために、好いことや面白いことにも心底からさうと感ずることの出来ないのが自分としては苦しいことに思つて居る。もう忘れよう、思つても思つても仕方のないことでは無いか、これも煩惱の變形であるから、來世に罪を受けなければならぬことにもなるでは無いかと、夜通し思ひ詰めた時の夜明には諦める心になつて、水鳥などが楽しさうに池で遊び合つて居るのを眺めたりもした。

水鳥を水の上とやよそに見んわれも浮きたる世を過しつ

あの鳥もあんなに面白さうにして居るとは見えても、彼自身は苦しいのかも知れないと、自分に比べて思はれるのであつた。

小少將さんから手紙を貰つた返事を書いて居るうちに時雨がさつと降り出したので、使が早く歸りたいと急いだために、

空模様も變つて來ました。これから雲も泣かうとするやうに。

と終りの筆を匆匆に留めて、自分はよく記憶しないが歌を書いたのであらう。暗くなつてから更にまた自分への返し歌が小少將さんから送られた。字もよく見えない程に濃い紫の紙に書かれたのであつた。

雲間なく眺むる空もかきくらしいかにしのぶる時雨なるらん

自分はどんな歌を最初に書いたのか、よく思ひ出せないのを其儘にして

ことわりの時雨の空は雲間あれど眺むる袖ぞ乾く間も無き

と書いて遣つた。

新造された船が何れも行幸の日の早天に池へ浮べられ、中宮様の御殿の前へ漕ぎ集つた。龍



頭鷓首を形どつた船は、それらの生物もこれに遠くないものに違ひないと思はれる程鮮やかに美事な出来ばえであつた。行幸は午前八時であると云つて、侍女達はまだ暗いうちから化粧に骨を折つて居た。高官達の席が西御殿に決められてあつたために、中宮様付きの人人は何時も程身を飾り立てるのに浮身をやつしはしない、却つて西御殿においでになる尙侍付きの侍女達が衣裳などを非常に苦心して、今日を晴れと思つて居ると云ふことであつた。夜明に自分の所へ小少將さんが來たので一處に髪を梳いたりなどした。八時と云ふことであつても、こんなことは遅れるものであるからと、自分は例の鈍い心で思つて、これまである扇が餘り廉つばいで、人に新調を頼んで置いたのがもう持つて來られる筈であると待つて居るうちに、鼓が鳴り出したので急いで御前へ參つた。

鳳輦を迎へ奉る水上樂が非常に好い。著御遊ばされたのを見ると、駕輿丁は下賤な者ながらも階段の上に昇つて居て、そして勿體なさうに、身の置き所が無いと云つた様子でひれ伏して居た。自分はそれを人事とは思へなかつた。立派な人人の中に交つて居ても、生れながらに尊卑の分際定められた人間と云ふものは、やはり何事に就いても、自身の低い身分であるこ

とが原因になつて苦勞の盡きないことは自分も同じであると思ふのである。

玉座は中宮様の御帳の室の西隣りにしつらはれてあつた。其處の南へ續いた室の二つある東の方にお椅子の用意がしてあつた。それから一室隔てた東の室の北南にずっと御簾を掛けて侍女達が居た。其處の南の端の柱の傍から御簾を撥ねて二人の内侍が出た。禮装をしたその人達は美しい支那繪の中の女であつた。左衛門の内侍は御劍を奉持する役である。青色の無紋の唐衣に紫に裾をぼかした裳を着けて、領布と裾帶とは白の浮織綾の眞中を樺色に染めたのを使つて居た。上衣は菊の色目の五重機織物で、重ねた練絹は紅である。もとの形の形も、作つて居る姿勢も、扇から見える横顔も皆美しく華やかに思はれた。辨の内侍は神器の御箱を俵持する役であつた。紅を下に重ねた上に紅紫の厚織物の褂を着て居るのであるが、上の唐衣と裳は左衛門の内侍と同じ物である。小柄な美人型の人であるが、恥しさに堪へられないやうに身體をこごめて居るのが氣の毒に思はれた。扇を初めとして身に附けた物は總て凝りに凝つたものであると見られた。領布は白の眞中を薄青にしたものである。昔下界へ來たと云ふ天つ少女の姿もこの二人のやうなものであらうとさへ思はれた。近衛府の將官が佳い形の正装でい



ろいろの儀禮を行つたのが快かつた。そして頼定頭中將が御劍を左衛門の内侍へ渡した。

御簾の中の自分の周囲を見ると、禁制の物を許されて居る女達は例の青色赤色の紋織の唐衣に白抜模様の裳を着けて居た。上衣は皆臙脂色の厚織物であつた。右馬の中將さんだけは紅紫を用ひて居た。下に襲ねた糊打絹は紅紫の色を一人一人の好みで濃くも薄くもしたのであつた。中襲ねは普通に人のする取り合せの黄の濃淡の襲ね、紫苑の色目、裏に青を使つた方の菊の色目などで、中には三重機（みよへ）の厚織物を用ひたのもあつた。禁制の物の用ひられない女の中で例のけばばしいことをしない中年の人達は無紋の青色、若しくは五重機（ごえ）の臙脂色の唐衣を着て居た。重ねには大抵綾織（あや）を使つてあつた。大海模様の裳の水色が華やかで快い。裾帶や領布は大方堅紋織である。袿は菊の色目であつた。若い人達には菊の色目の五重機の唐衣が用ひられてあるが、それにも各自が及ぶ丈の數奇を盡してあるのであつた。重ねには白と青の上に臙脂色が使はれてあつて、下の單衣を青にしたのもあつた。上は臙脂色で次次に濃いのを下に襲ねた中に白が一枚混ぜられてあるのもあつた。總て意匠の佳いのが氣の利いた人に見えた。何と云つて好いか解らぬほど大層な技巧を施した扇を持つた人もある。平生こそ混つて並んだ美

くしい人とさうでない人との區別ははつきりと解るが、皆が皆精いつばいにお化粧をして居ては唯極彩色の繪のやうで、年の行つた人も、行かぬ人も、髪（かみ）の少し減つたのと、多い盛りに思はれるのを後から見ただけで見當を付けねばならない。それも唯自分の座から後が見える人だけより解らない。また正面の方から見ると扇の上から出た額は不思議な程容貌を品よくも卑しくも見せるものであると云ふことだけが解る。こんな時に美人であると云ふ印象を與へる人がそれこそ類のない美人であらう。

女官で中宮様付きを兼ねて居る五人はやはり自分達の席に混つて居た。それは内侍が二人と命婦が二人と御食事係の女官が一人とである。中宮様にお食事を差上げるために筑前と左京の二人の命婦が禮装で、内侍の出入りする隅の柱の傍から出た。あら天人と云ひたいほどであつた。左京は青色の上著に薄青の無紋の唐衣を着て、筑前は菊の色目の五重機の織物の唐衣を着て居た。裳は例の置模様のものである。御前まかなひは橘三位が勤めるのであつた。青色の唐衣に支那綾の黄を用ひた菊の色目の袿を着て居たやうである。髪はほんの少しだけ結び上げてあつた。自分の席からは柱が邪魔になつてこの人だけがよく見えなかつた。



殿様が若宮様をお抱き申しておいでになつた。陛下が御自身の手へお抱きとりになつた時に若宮様は元氣の好い泣聲をお立てになつた。若宮様の御劍は辨の宰相さんが持つて出た。中央の間の中戸の西に奥様がおいでになつた。其處へ若宮様はまたお入りになつた。奥様が外の室へ更に若宮様をお伴れ申しておいでになつてから宰相さんは侍女達の席へ歸つて來た。晴れがましくて恥しくてならなんだと云つて居るその人の頬には、上つた血の色がまだ醒めずにあるのも、なつかしい美しくしさを示して居た。美貌を勝れた華やかな服で装ふこともこの人は忘れずにして居た。

日が暮れ相になつて奏樂の聲はますます面白くなつた。高官達はお召を受けて御前へ參つた。萬歳樂、太平樂、賀殿などと云ふ舞もあつた。長慶子と云ふ曲を向ふへ歩き歩き舞つて、築山の小徑などで袖が翻つて居た。遠くなつて行くに隨つて笛も鼓も松風も一處になつてしまふのが非常に面白く思はれた。綺麗に底の浚へられた川筋を小流れが心地よく早く走り、池に波が立つて寒い感じがそぞろに覺えられるのに、陛下はお上著の下へ唯柏を二枚だけより召しておいで遊ばさない。左京の命婦は自身が寒いので、陛下がお氣の毒でならないとばかり云ふ

のを、傍に居る人達が笑つて聞いて居た。筑前の命婦は、

「圓融院様がおいで遊ばした時に此方へ行幸を遊ばしたことが幾度も御座いましたよ。」

と云つて、その折折の御供に加つた自身の見聞したことなどを思ひ出して話すのであつたが、泣き出しかねない風であるから、そんなことになつてはならないと思つて誰も餘り相手にならない。この人と自分の居る所とは几帳に隔てられて居たのである。

「その時もまあどんなに御盛んなことだつたでせう。」

とでも云ふ人があつたなら、すぐにも涙が零れ出たであらう、

御前で管絃樂の起り初めた頃、若宮様のお泣聲が向ふでした。顯光右大臣は、

「この萬歳樂に宮様のお聲が丁度合ふ。」

と愉快さうに云つて居た。公任左衛門督などは萬歳樂、千秋樂と樂に合せて云つて居た。主人の殿様は、

「自分はこれまでに仰ぎ奉つた行幸を光榮の限りであると何故思つたのでせう。こんな嬉しい行幸をお迎へする時もありましたのに。」



と酔泣きをしておいでになつた。それはもとより云ふまでもないことであるが、自身が満足すべきことに十分の満足の意を現して居ると云ふことは氣持の好いことである。殿様は外の御殿へお行きになつて、陛下はお椅子から後の室へお移りになつた。そして右大臣をお呼びになつて中宮職の諸員、此處の家職の人人の位階陞叙のことをお書かせになつた。通方頭の辨から御参考に遊ばすことをお聞き取りになつたやうである。

藤氏の高官達が皆階段を降りて拜禮した。これは若宮御誕生の祝意を表し奉るためである。同じ藤原氏でも南家、式家の人人は交つて居ない。それに續いてまた第二皇子の別當に新任された齋信右衛門督（中宮大夫である）や、位階を進められた俊賢中宮亮、實成參議中將などの拜舞があつた。

陛下が中宮の御帳へ入御になつて何程の時間も経たないと思つて居るうちに深更になつた。

「御輿を寄せまして御座います。」

と申すのにお促がされになつて陛下はお立ちになられた。

翌日の朝、まだ霧も晴れない時分に宮中の御使が中宮様へ参つた。自分は寢坊をしたために

よう見なかつた。今日から若宮様は中宮様の御殿へ正式に御同居遊ばされるのであつた。行幸と云ふ特別な事であつた翌日であるから、丁度一年が終つて一年の初めの來た時のやうに、いろいろのことがこの日に決められたりした。第二皇子の家職、別當、侍女などの名も發表された。これは豫め前から解つて居たことなのであらうが、少しも知らずに居た私は自分の何事にも敏感で無いのを可笑しく思つた。

これまでは中宮様のお居間をまだ御健康な當時のやうには裝飾してなかつたのであるが、それも今日からはもとの華やかさに返された。御子をお持ち遊ばされることの遅いことを誰も御幸の中の一つの缺目のやうに思つて居た方様であらせられるだけ、若宮様とお揃ひになつた今のでたさは、限りもないこととお見えになるのであつた。夜が明けると直ぐ奥様が此方へおいでになつて若様のお世話をなされたりすることも、これまでとは違つた趣の殖えた一つである。

日が暮れて月の景色が面白く目の前に展開された。實成中宮亮は侍女に逢つて特別なお悦びでも取り次がせようと思つたのか、人の集つて居さうな所を捜して居たが、丁度若宮の御入浴



のある時間で、誰も其邊に出て居なかつた。細御殿の端の宮の内侍の部屋の外へ亮は来て、

「誰方が此方にいらつしやるのですか。」

と云つて居た。宰相さんと自分は奥の方の室に居て、口の室はまだ格子のしまりがちやんとして無かつた。亮は上の方を手で押し開けて、

「おいですか。」

とまた云つた。自分達はまだ何とも云はずに居た。大夫の聲でまた、

「此方にいらつしやるのですか。」

と呼ばれた。これでまだ返辭をしないで居るのは餘りに態とらしいと思つて、一寸した返辭などをした。外の人は二人とも極めて上機嫌な人達である。

「私には返辭をして下さらないで大夫を特別待遇になさるのですね。御尤もなことですが、餘り感心が出来ないですね。こんな時に何も上官、下僚の別を附けないでもいいぢやありませんか。」

と亮は自分等を笑つた。「あなたふと、あなたふと、今日の尊さ」と催馬樂が歌はれたりし

た。月が次第に明るくなつて行く。格子の中の戸を下へ外して下すやうにと責められるのであるが、高官達を屈ませて話すと云ふことは、こんな所と云へば云ふものの餘りになし難いことである。若い人であれば分際と云ふやうなことに拘泥して居ないと云ふことも時には愛すべきことに取れるであらうが、そんな嬌態は自分達に似合はないと思ふので格子の栓から手を放さず居た。

若宮の五十日のお祝は十一月の一日であつた。例のやうに侍女達が装ひ立てて参り集つた御前の有様は繪に描いた歌合や繪合のやうであつた。御帳の間の東から縁座敷の柱の所へまでずつと几帳が立て續けられて、宮様のお席へは北向きに御膳が奉られるのであつた。中宮様のお席は西の方であつた。沈の敷膳、銀の高膳などは例のやうであつたのであらうが、遠くてよく拜見することが出来なかつた。御前まかなひは宰相さんで、讃岐がお取次ぎをした。何れも釵子を挿して居た。もとより髪は結び上げられてあるのである。東は若宮のお席で、おまかなひ役は大納言さんである。小いお膳に小いお皿が並び、お箸臺や洲濱臺も雛遊びの道具のやうなのが供へられるのであつた。東の縁座敷の御簾を少し上げて辨の内侍、中務の命婦、小中將な



どと言ふ豫ねてから定められてあつた若宮のお給仕の人が出た。人の後に居た自分はこれもなく見なかつた。

今夜から若宮の少輔の乳母が禁制服の着用を許された。其の人は神神しい風采で若宮をお抱き申して居た。そしてまた御帳の中で奥様がお抱き替へ申して膝でお席へ進んでおいでになつた。火の明りがその御様子をことに美しく思はせた。赤地の唐衣に白抜模様の裳までを著けておいでになるのは若宮へ對し奉つて宮仕への禮を失はぬためであるがおいだいたしく思はれた。そしてまた愛情はこのやうに神聖なものであると云ふことをも教へられる氣がした。

中宮様は紅紫の五重機のお召の上に臙脂色の小袿を著ておいでになつた。

お祝の餅は殿様からさし上げられた。

高宮達の席はやはり東御殿の西座敷である。右大臣と内大臣は此方の座敷から見えて居た。他の人人は細御殿の縁へ来て酔に浮れた言葉を聲高に交して居た。殿様から人人へお出しになる贈物の詰められた櫃や、折詰料理の入れられた籠を其方の御殿から正殿へ運んで來ることを公達等はした。其等の物は高欄の前へずつと並べられた。立てた炬火が暗いので品品を見分け

るのに雅通少將などは紙燭を持たされて居た。その一部は明日から陛下の御謹慎日になるからと云つて、今夜のうちに御所へ運んで行かれるのであつた。

中宮大夫から高宮達の御前へ出る許しをお與へになつて頂きたいと啓せられた。

「お聞き濟みになりました。」

と云ふことで、殿様を初め公卿は正殿のお座敷へ入つた。東の端の妻戸の處までが人で充満になつた。侍女達は二列三列になつて坐つて居るのであるが、その前へ當つた御簾の向ふの高官達は御簾を巻き上げたりする悪戯をした。大納言さん、宰相さん、小少將さん、宮の内侍などの座の近くに席を得た顯光右大臣は、几帳にある開口を引いたり、下から撥ね上げようとしてたりして中の者を厭がらせた。年を取つていらつしやる癖にと嘲笑されて居ることも知らずに扇を奪つたりさまざまないたづらをして見せた。齋信大夫が杯が持つて侍女達の居る座敷へ出た。みの山の催馬樂が歌はれて、ほんの儀式だけの管絃であつたが面白く合奏された。その隣の室の東の柱の傍へ實資右大將が來て居た。前に居る人の襲つた服の裾や袖口の色を靜かに鑑賞して居るのが衆に勝れた紳士的な態度であると思はれた。もう皆酒酔になつて居ると云ふこ



とに平生の畏敬の念が緩和させられ、また誰であるか解らないことであると思ふ利己的な心も生じて、自分は暫くの間右大將の話相手になつて居た。人をそらさない交際上手の才子よりも却つて話心地の好い人であると自分は右大將を思つた。その人は杯の廻つて來ることを祝の歌のむづかしいために恐れて居ると云つて居たが、それもお決りの千代萬代の作で無事に通つた。公任左衛門督は、

「ええと、この邊においでですか、若紫は。」

と云つて御簾の中を窺つて居た。自分は源氏物語の中に賞めて書いた女性の何れにも當つて居ないと謙虚な心で思つて居る。ましてこの邊に若紫の夫人をもつて自在して居る作者が居るわけは無いと自分は苦笑しながら聞いて居た。

實成に杯を賜はると呼ばれた時、職員席に居た實成權亮が父の公季大臣の居るために一旦縁側へ出て下手からお祝の酒を頂きに出たのを見て、公季内大臣は酔のせいもある嬉し泣きをして居た。權中納言が隅の室の柱の傍で兵部さんを引き倒して大聲を立てさせたりして居たが殿様もそれをお制しにならない。こんな調子ではどんな困ることが追ひ起るかも知れないと思つ

て、散會になると直ぐに宰相さんと一處に隠れてしまはうとしたが、東縁の方から子息方や兼隆中將などが入つて來て居て大騒ぎになつて居るので部屋の方へも通れない。二人で御帳の室の後へ隠れて居ると殿様がお見付けになつて、隠してくれた几帳や屏風を取り拂はせておしまひになつた。

「歌を一つづつ詠めば許して上げよう。」

かうお云ひになつた。自分は恥しくて溜らず、きまりが悪くてならないので、よく考へても見ずに、

いかにいかが數へやるべき八千とせのあまり久しき君が御代をばと申し上げた。

「ああ立派なお祝ひの歌が出來た。えらい。」

とお云ひになつて、二度歌をお口誦みになつた直ぐ後で、



あしたづの齡し持たば君が代の千とせの數もかぞへ取りてん

と云ふお作をお聞かせになつた。恐しい程の醉態を見せておいでになるが、片時もお忘れにならない御自身の希望の御告白であるから、すらすらと歌はれたのであらう。この偉大な勢力を持つ人に是程の尊重をお受けになる若宮様であればこそ、總ての御幸ひを全く遊ばされることも容易に想像が出来るのである。御壽命の長さはもとよりのこと、光に満ちた御生涯をお享け遊ばす方であると云ふことは自分のやうな者にも豫言が出来るのである。

「宮様お聞きになりましたか、私の歌は傑作です。」

と殿様は自慢をなされて、

「宮様の親で私は悪くない。私の娘で宮様はお悪くない。母様も自分は幸福者だと思つて笑ふのでせう。好い良人を選んだものだと思つて居るのだらう。」

こんな戯談までをお云ひになるので、よくよく酔つておいでになるのだと思はれた。中宮様は御心中で御迷惑に思召すに違ひないが、唯大やうに聞き流しておいでになつた。奥様は居辛

くお思ひになつたのかお居間の方へそつとおいでになつた御様子であつた。殿様は、

「私が附添ひ役をしないと母様はきつと憤るから。」

と云つて、周章で御帳の中を斜向にお通りになるのであつた。

「宮様は無禮だとお思ひになるか知れないが、併し親と云ふものがあらゆることで御尊嚴の擁護をさせて頂いて居るのだから。」

とおつぶやきになつたのを侍女達は笑つた。

中宮様の宮中へお入りになる日が近くなつたので、侍女達はお産に附帯した御祝宴などにした身の廻りの仕度に續いて、今度は何を著やうか、どんな意匠を用ひやうかと云ふことに一處懸命になつて居るのであるが、中宮様は物語類を綺麗に寫し集めた草紙の新調をお思ひ立ちになつて、そのことばかりにお氣をお入れになつた。自分はその御助手役で、夜が明ければ直ぐ御前へ參つて、色色の紙をそれぞれに選つて決め、また原本を添へて、處處へ依頼狀を書くことをするのであつた。また出來上つて來た草紙を綴ぢ上げるのも自分の役である。毎日毎日このことばかりに掛つて日を暮した。



「何故この冷たい時節にそんなことを遊ばすのでせう。」  
と殿様は口で云つてはおいでになつたが、好い薄葉や筆や墨などを此ためにお獻じになつた。  
新しい硯をも持つておいでになつたが、それを宮様は自分に下された。

「式部に取られたのは残念だ。」

殿様がこんな戯談をお云ひになるのを聞きながら、几帳や屏風で身體の隠れるやうにして御前に居る自分は、こんなお役を勤めて居ると、物知りらしく見せるのが好きなやうで恥しい。なぜ最初に御辭退を申し上げなかつたかと自分自身を責めて居た。殿様はまた自分へも墨や筆を下された。

自分は自作の小説類を家から取寄せて部屋にそつと隠して置いた。自分が御前へ出て居る間に殿様がそつと部屋へおいでになつて、彼方此方の戸棚を開けて小説をお見附けなつた。そしてそれを御二女の尙侍へお上げになつた。自分が改作した方のは貸し失つたりなどして原本だけを取つておいたのであるから、それを見ては拙い作家であると云ふ評をする人が屹度あるであらうと思はれるのであつた。

前の池へ來る水鳥の数が一日一日多くなつて行くのを見て、宮中へお供して入るより前に、此處の雪の日に一度逢ひたい、どんなにこの庭の景色が勝つて見えるであらうと自分は何時も思つて居たが、少しのお暇を頂いて實家へ歸つて居ると二日目位に意地悪く雪が降つた。

面白くも何ともない自分の家の庭をつくづく眺め入つて自分の心は重い壓迫を感じた。宮仕に出る前の自分は淋しい徒然の多い日を此處で送つて居た。苦しい死別を経験した後の自分は花の美しさも鳥の聲も目や耳に入らないで、唯春秋をそれと見せる空の雲、月、霜、雪などに由つて、ああこの時候になつたかと知るだけであつた。何處まで此心持が續くのであらう、自分の行末はどうなるのであらうと思ふと遣瀨ない氣にもなるのであつたが、自分と同じ程の鑑賞力を持つ文學好きの女同志とは随分眞實のある手紙を書き交したものであつた。自分の直接知らぬ女からもそんなことで手紙を貰つた。自分にはその文學好き仲間の交際から慰みが見出だされて居たのである。これを最も人間らしい生きやうであるとは思へないながらも、他人から侮辱を受けたり、悲しい目に合せられたりすることは知らないで其頃は濟んだのであつた。宮仕以後の自分は昔の自分が知らずに居られたこと迄も悉く味はなければならぬことになつ



たと、自分はこんなことを思ふのであつた。

自分は試みに小説を出して読んで見たが、それから受ける興味は淡いものであつた。昔のやうに心を没了してしまふやうなことはもう出来ない。極めて仲の善かつた友人に對しても、宮仕に出た自分を鐵面皮な輕薄な女であると思つて居るであらうと思ふと、手紙が書かれないことになる。氣取る癖のある女には、手紙の返事を宮仕仲間の女が見るやうなことがあつたりすれば、それだけでも世間から尊敬を拂はすことを少くすると心配をさせるのが氣の毒であるしそんな女はまた自分の複雑な哀愁に同情の出来る人で無いのであるからと思ふと、手紙を書く要求が無くなつたりして、交際を絶つと云ふやうなことで無くて結果がそれと同じことになるが多い。また向ふの方でも、宮仕に一生を託すと云ふ思想に懷疑が起つて自分が家に來て居るのであるとまでに自分を想像して知つて呉れる女が無いから、様子を尋ねる手紙も出してくれない。

自分は一寸したつまらないことに就けても頼りのない淋しい世界へ來て居ると云ふ氣がするのである。こんな心持は宮仕に出て居る時にもあつたが、その時よりも今の方がもつと悲しい。

今の自分は氣のびつたりと合つた友、自分の人格を少しでも認めて呉れる人、情を籠めた手紙の貰ひ遣りが出来る人、自然に仲善くなつた朋輩と云ふやうな人に少しの愛著がある。自分ながら生活の意志の薄弱なものであると自分が思はれる。御前で寝む夜のある毎に何時も近い處で寝んで自分によく話をして下すつた大納言さんが自分には戀しくてならない。大納言さんは奥様のお身内であり、殿様の思ひ人である。土御門殿の侍女の中でその人の羽振に並ぶ人の無いことは今更云ふまでもない。その大納言さんが懐しいと云ふのは自分の心も世間的なのであらうか。

うき寝せし水の上のみ戀しくて鴨の上毛にさえぞおとらぬ

こんな歌を大納言さんへ送つた。返しは、

打ち拂ふ友なき頃の寝ざめには番ひし鴛鴦の夜半に戀しき

かうであつた。字なども極めて美しい。よくこんなにも何もかも整つた人があるものである



と思つた。

雪の日に自分が丁度實家へ来て居たことを宮様は本意なく思召して、行かないでも好いものをと仰せになつたと云ふことは朋輩の手紙にも見えた。また奥様からのお手紙に、

あなたが家へ行かうと云つた時に留めたのは私でせう。それにあなたは急いで歸つて行つてそしてまた直ぐ来るやうに云つて置きながら容易に出て来てくれない。何だか私へ意地悪をして居るやうです。

と云ふことが書いてあつた。それは御戯談ではあらうが、奥様があの時にお留めになつたのは眞實のことであるから、濟まないやうに思つて自分はまた土御門殿へ参つた。

中宮様が御所へお入りになる日は十一月の十七日であつた。お立ちを午後八時と決められてあつたのである。何時の間にかもうずつと時は更けて居た。髪を結び上げて禮装をした侍女の数は三十幾人と數へられた。その外にお供する女達の數も多いのである。中央のお座敷に隣つた東向の縁座敷に宮中からお迎へに來た女官達が十人程休んで居た。自分達は南の縁座敷に居るので、其處とはわづかに妻戸一つが隔てになつて居た。宮様のお輿には宮の宣旨が陪乗した。

奥様は若宮様をお抱き申した少輔の乳母と一處に飾飾りの車へお乗りになつた。第二の車は黄金作りで、乗者は大納言さんと宰相さんであつた。その次には小少將と宮の内侍が乗つた。第四の車へ自分は右馬の中將と二人で乗つた。この自分の同乗者はつまらないものの伴にされて居ると云ふ不平を露骨に見せた。自分はその虚榮心を滑稽であると感じて居ながらも、また宮仕へと云ふもののむづかしさと苦勞の多いのを思はずに居られなかつた。典殿の侍従と辨の内侍の車が此後から來た。續いて來る車には左衛門の内侍、殿の宣旨、式部の三人が乗つた筈で、其後の誰誰と決められて無かつたから思ひ思ひの伴を選つて乗つたやうである。自分達の下車した上には月が明るく照つて居た。何と云ふきまりの悪いことであらうと思ひながら夢中で歩いた。自分は先に立つた右馬の中將の行く方へ隨いて行けばいいと云ふ風にして行くのであるから、後で見る人にはさぞ可笑しいであらうと恥しく思はれた。弘徽殿の細座敷の第三の戸の附いた室へ入つて自分が横になつて居る所へ小少將さんが來たので、例のやうに宮仕への氣苦勞を話し合ひ、先刻車の中で形の崩れた著物を脱ぎ、綿の厚く入つた物を幾枚も重ねて著て、手提火鉢に火を入れて身體を暖めながら、こんなことをしなければならぬ程身體の冷え



たことをお互ひに情けながつて居た。此處へ實成參議、兼隆中將、公信中將などが見えて、自分に疲勞はないかと思舞つて下さつた。自分は恐縮をした。今夜は自分の存在を人に忘れて居て貰つて、ゆるりと休みたかつたのを、誰かから自分の此處に居ることをお聞きになつたのでおいでになつたらしい。難有迷惑なことであるとも思つた。

「明日は早朝に伺ひます。今夜はもう身體がふなふなになりましたから失禮して宅へ歸ります。」

などと體のいいことを云つて、此處に近い西の通用御門から皆家へ歸つて行くやうであつたがかうした若い人達のその家なるものが甚だ怪しい、何處にある自宅かもとより解らないなどと自分は思つた。自分の戀の相手がその中に居てさうした嫉妬めいた感情を起したのではない。自分は一所に居た小少將さんが可哀相であつたのである。美くしい小少將さんは心底から自身の薄命を嘆いて居る人であつた。人物から云つても家柄から云つてももう少しの出世が出來て居なければならぬこの人のお父様の不遇であることも原因の一つであることは云ふまでもない。

昨日殿様から宮様へなされた贈物を宮様は今朝になつて細かに御覽になるのであつた。お髪の毛の箱の中の小道具の織巧な美しくさは言葉に現しやうもない。一揃ひのお手箱の一つの方には白色紙と色の紙を綴ぢた草紙が入つて居た。今一つの方の掛子の上には古今、後選、拾遺抄の諸集を行成中納言と僧の庭幹とが一帖に四巻づつ書いた物が詰めてあつた。表紙は羅で、同じ色の唐組の紐で綴ぢられてあるのであつた。下には能宣や元輔などと云ふ歌人の家の集を寫した物が入られてあつた。これは延幹と近澄の二人の筆で、重重的い表装などはしてないが座右に出してお置きになるものとしての手輕な装幀に十分の珍しい意匠が見せてあつた。

五節の舞姫は二十日に御所へ參つた。實成參議の出す舞姫へ宮様は唐衣と裳を下賜遊ばされた。兼隆中將は自身が出す舞姫の爲に日蔭のかづらの御下賜を願つて出たので、お遣しになる序に薫物を入れた一つの箱をお贈りになつた。飾りには梅の造り枝が附けられた。眞際になつて用意のされる例年とは違つて、今年は凝りに凝つた五節の舞姫の姿が見られると云ふ評判が前からあつたので、少しの見落しもなく見物しなければならぬと思はない人もない。丁度この御殿の東向ひになるところの置戸の前に、間と云ふものがない程充滿に點しつらねた灯の、



晝よりも明るい所を歩いて五節所と決められた所へ入つて行く舞姫の一行の人は、ようもあのやうに平氣に澄ませたものであるとは見えるが、自分には他人事とは思へなかつた。仕方がないと云ふかう云ふ時の諦めの痛さを自分の身にもしみじみと感じた。若い公達などは其顔の傍まで顔を持つて行き、脂燭をも突きつけないばかりにして見るのである。かう云ふ人達は幔幕を引いて遠ざけてあつても、それは形式だけで、目には此時と同じく露骨に自分達が見られたのであらうと、自分は御所へ入つて來た晩のことを思ひ出して見ると、今更のやうに胸に高い動悸が打つのであつた。

業遠の出した舞姫には錦の唐衣が著せてあつた。夜の錦も今夜は珍しくきらきらしいものであると思はれた。餘りに多くの服を重ねたこの舞姫の姿は身じろぎも出来ないやうで、女性の柔和を失つた傾きがあつた。若役人は特別にこの舞姫を大事がつて居た。陣下もこの御殿で舞姫の參入を御覽遊ばされるのであり、殿様も戸口の外に立つておいでになるのであるから自分等は窮屈な思ひで居るのである。尾張守中清の舞姫は背も幅もいい程にある少女で、品の善さも奥床しさも十分に備へた舞姫であると人人は評した。兼隆中將の舞姫にも一點の不足が

ないと思はれたのであつたが、附女の中の下女の餘りに肥つて居たのを、田舎めいて居ると人は密かに笑つて居た。最後のは實成參議の出した舞姫であつた。思ひなしか華やかさが群を抜いたもののやうに見えた。十人の附女を隨へて居たが、火影を歩むその姿はどれもこれも、藤壺の縁の御簾際に袖や棲を見せて得意に見物する人達にも劣らない美しくいものと見られた。

五節の第二日の寅の日の早朝には殿上役人が揃つて中宮御殿へ參つた。決つた儀式であることなことも若い侍女達には面白くてならないらしい。これは宮中を幾月か遠のいて居たせいもあるのであらう。併しかうした時の禮装である小忌衣を著た朝臣は一人も無かつた。この晩に業遠東宮亮を召して薫物を賜つた。大きな箱に高く盛つて入れたものであつた。中清へは奥様からお贈物があつた筈である。今夜は五節の舞が清涼殿の庭で試演される日であつた。宮様は御見物のために清涼殿へお上りになるのであつた。若宮様が御同列でおいでになるために魔除けの撒米を其處此處でする聲が五節と云ふものの情調とも、お后のお上りと云ふ氣分とも離れ離れになつて聞かれるのであつた。自分は晴れがましい所へは出たくない氣がするので、部屋



で休息して居やう、若しお召しでもあつたらその時に上らうと思つて居た。小兵衛、小兵部なども自分と一所に火鉢の傍に集つて居た。

「人が多くて、そして狭いのですものねえ、どうしてよく見物がさせて頂けるものですか。

無理ですわ。」

などと云ふのを聞いて居る所へ殿様がおいでになつた。

「何故こんな所にぼんやりとして居るの、さあ俺と一所に行かう、早く。」

自分は引かれるやうにして清涼殿の見物席へ伴はれた。試演の舞姫はどんなに心も身も疲れることであらうと同情しながら見て居るうちに、中清の舞姫が病を起して退出して行つた。全體の夜の光景が夢のやうに思はれた。舞が終ると直ぐ宮様は藤壺へお下りになつた。

此頃自分達の逢ふ公達は、誰も決つたやうに、舞姫の参つて居る五節所の興趣に富んだことばかりを云つて居るのであつた。

「御簾の縁の切れや其處の帽額が舞姫一人一人で變つて居るのとはよりですがね、其處等にちらちらと見える女の頭つきや様子と云ふものまでがそれぞれの特徴を持つて居ますから

ね。それを見比べて廻るのがどんなに面白い事か知れませんか。」

などと自身の品位と云ふものさへ忘れて居るやうなことをも云ふのである。

人人が五節に興味を持つことが今年程でない年でも、上覧の日の附童女などの氣の張られることは並でないのであるから、まして今度の人達はどう云ふ心持で出て来るであらうと、自分は同情と好奇心を等分を持つて見物しようとした。そして人人の歩み並んで來たのを見てわけもなく胸の轟くのを感じた。氣の毒でならなく思つた。その中に自分のために特別な縁故のある人は一人も居ないのである。かうした晴れの役を勤めるのは皆それ相應の自信があつてのことであるから、これも好い、あれも美しい姿であると目移りのすることが多くて、結局優劣が無いやうに見えるのであつた。近頃の風潮と云ふものに一步も後れないで居る人人はこんなことにも鋭敏な批評をして居るのであらうと思はれた。自分はたつたこんな明るい晝間に、扇も絶對の顔の隠し場所にはならぬ人人が、若い公達を近い所へ置いて居ると云ふことは、貴い身柄でもなく、この辛抱を敢てしなければならぬ階級にあることを自覺して居る人達であるとは云つても、また人人に誰よりも自分の美貌を認めさせたいと云ふ慢心があるとは云つても、



どんなに厭なものであらうと云ふことばかりを思つて苦しがつて居た。融通のきかぬ損な持前である。業遠が童女の上に被せた汗衫に青の白襟の使つてあるのをいい思ひ付きであると思つて見送つた後から、實成參議が童女に赤い汗衫を着せて、それと配色のいい青い色の唐衣を下女に著せてあつたのを見て、更に奇抜な意匠であると感心した。その組の童女は顔もよく隠して居て、その一人はちらとより眉目を見せなかつた。兼隆中將の童女は脊のすらりとした髪的美くしい子であつた。皆下には濃い紫の袖を着て居た。汗衫の下の上著は一人一人別な色が使つてある。それが皆五重機の厚織物である中に、中清のには唯だ無地の赤紫を着せてあるのが却て奥床しく品よく思はれた。色白な美人らしい下女の傍へ六位の藏人達が寄つて、扇を顔から離させようとすると、その人は自身の手でそれを投げ出してしまつた。これが女であるかとその所作には呆れさせられながら、自分達をこのやうにして庭を歩かせよと云ふ命令が上の方から下つたとしたなら、自分はやつぱりあの通り無神経になつて命ぜられる通りのことをするであらう、昔の自分は宮仕女と云ふ羞恥の觀念の鈍つた人達の中に交らうとは夢にも思はなかつた、思想の墮落は目に見えないのをいいことにして、飽迄も宮仕女になり切つて、神経を麻

痺させてしまふのも氣樂なことであるかも知れない。こんなことを自棄になつて自分が思つたりするのも、つまり現在の自己を肯定することが出来ないからであつて、深酷な悲みが自分を窺つて居るのを知ると、目に見て居るものの何物にも興味が持てなくなるのである。

實成參議の舞姫の部屋は藤壺から直ぐ見える所であつた。庭を隔てた置戸の上から所謂中のゆかしい御簾の端も見えるのであつた。向ふの話聲も少しづつ聞えて來た。

「參議の妹の女御さんに附いて居た左京と右馬と云ふ二人が素知らぬ顔で舞姫付きになつて來て居ますよ。」

と其女達を見て來た兼隆中將がこの御殿で話すと、

「最初の晩に後見役のやうにして舞姫の直ぐ後の東側に居たのが左京だ。」

と源少將もそれに同じて云つたと云ふことが自分達仲間の評判になつた。

「面白いことですね。」

と自分達は云つて、これはこの儘でうちやつては置かれぬ、曾て花花しい女御の附人である云ふ誇を持つて住んで居た御所へ、五節の附女と云ふ微微たる役を勤めに出て來て居る



と云ふことは、普通の心より持たない者には出来ないことである、その人の化けおほせたつもりで居る目を少し位醒させてやりたいと云ひ合せて、宮様のお手許に多くある扇の中から、蓬萊山の繪を描かれてあつたのを選んで、それを贈物にしようとするのであつた。流轉の定めない身に比べて、宮中は何時も變らぬ永世の國であると云ふ氣がするであらうと云ふ意を籠めたのであるが、先方へは通じないことであつたに違ひない。箱の蓋へそれを擴げて、日蔭のかづらを丸めたのへ差櫛や白粉の包を多く結び附けたのを添へた。

「もう相當な年だのに、若い人のやうに反つた櫛なんかを挿して居たから品が損はれて居た。」

と源少將などが其人のことを云つて居たのを思つて、當世風に見ともない程反つた櫛を用ひたのであつた。それからまた一所に添へる黒方香の包みやうを態と不恰好にした。消息は白い重ね紙の立文にした。筆者は大輔で、歌は自分が作つた。

多かりし豊の宮人さしわきてしるき日かげを哀れとぞ見し

宮様は、

「やつぱり體裁をよくしてやる方がいい、扇なんかも一つ位やらずに澤山お遣り。」と仰せになるのであつたが、

「大層に致しますと却つて無意味になりますので御座います。あなた様の御下賜遊ばします物なら、判じ物をさせるやうなことは要らないので御座います。これは唯だ私等が勝手にいたしますことにさせて置いて頂きます。」

と申し上げた。自分達の中の一人が部屋で使つて居る侍で、方方へ顔の知れ渡つて居ない男に、

「これは中納言のお手紙で、お邸から左京さんへ。」

と大きい聲で云はせて、向ひの御簾口へ置かせに遣つた。若し引き留められたなら困ると自分達はひやひやとして居たのであつたが、直ぐに走つて來た。女の聲で、

「何處から此處へ入れたの。」

と云つて居たのを思ふと、無論女御様からのお使と信じて居るらしかつた。



自分にはそれ程面白いとも思はずに過してしまつたものの、その五節が済むと俄かに宮中の日送りが寂しく物足りなくなつた。最終の夜の調楽は實際面白いものであつた。まして若い殿上役人などは今日此頃がつまらなく思はれるであらうと想像された。今度宮様が御所へお入りになつた晩から高松の奥様の方の小さい若様達にも内儀の出入りが許されたので、その方等が彼方此方と座敷の中をお歩きになるので、はつと思ふやうなことばかりが多かつた。併し自分は年の行つた者であるから隠れる資格があると云ふやうにして居るので、顔などは見られたこともない。五節の頃が戀しいとも特別にお思ひにならない風で、若様達は若い小兵衛や童女のやすらひを相手に、裳や汗衫によれつもつれつして小鳥のやうに戯れ合つておいでになつた。今年有加茂の臨時祭の祭使は若様の教通中将さんである。丁度祭の前日は陛下の御謹慎日であつたから殿様も御宿直をなされた。高官達も社前で舞の役を勤める公達も皆此晩は御所に居たので、侍女達の部屋になつて居る弘徽殿の細座敷の邊りは夜通し話しに来る客で賑かであつた。

祭の日の早朝に内大臣の随身の男が来て若様の隨身へ品物を渡して歸つた。それは五節の時

に子息の實成さんの舞姫の部屋へ持たせて遣つたあの箱の蓋の上へ、銀の草紙箱を載せたものであつた。箱の中の奥には鏡を置き、沈の木で造つた櫛と、銀の笄を入れて、祭使の若様が途中で髪を撫で附ける用に使はせようとしたものである。その蓋に蘆手で書かれた歌は五節の日の返歌であらうが、字が二つ落ちて居たので確として歌の意は解らない。それに就けても先方の見當違ひが氣の毒に思はれてならなかつた。あれを宮様からのお贈物と取つて大層な御返禮めいたことをされたからである。自分達が女仲間で軽い諷刺をして見せただけのものであつたのに。

今日は来ておいでになる奥様も宮様のお上りになるのに隨いて清凉殿へ見物においでになつた。内藏の命婦は試樂の舞者には目も遣らずに、自身が育てた權中將さんの顔を眺めては泣き眺めては泣きして居た。猶續いて御謹慎遊ばされる日であつたから、祭使の一行が加茂から歸つて參つてからも、御前での神樂はほんの形式だけより行はれなかつた。舞者の中の兼時は去年まで舞にしつくり身體の合つて居たにも關らず、今年は若若しさが無くなつて衰への目立つやうになつて居るのを見て、その人はもとより自分の知らない人であるが、自分は自己に對す



る批評と混同した悲哀をそれから強く得た。

十二月の二十九日に自分は實家から宮中の中宮御殿へ参つた。初めて御奉公に出たのもこの十二月の二十九日と云ふ日であつたと思ひ出して、その時分に比べて人間が別な程宮仕へに馴れたものになつて居る。自分は悲しい運命の女であるなどとしみじみと思つた。宮様の御謹慎日であるため御前へも出ずにその儘部屋で心細い思ひをしながら寝に就くと、近く眠つて居る人達の中の誰かが、

「御所は外とは違ひますのねえ、何處に居てももう今頃は眠られるものですがねえ、よく聞える沓の音と云ふものが眠入つて居ても直ぐ目を醒させてしまふのですものね。」  
と浮氣者らしく云つて居るのを聞いて、

年くれて我世更け行く風の音に心のうちのすさまじきかな

と歌つた自分は、自己の老を外の形で歎いて居るのに過ぎないとみづから憐れまれた。

三十日の夜に追儼の式が早く済んだので、自分は部屋で齒を染めることなどをしてゐる所へ

辨の内侍が来て話などをして居るうちに、その人は寝てしまつた。下段の室の方では御裁縫係りの女藏人が童女のあてきの仕立てて居る重ね物の折目を附けて遣つたり、縫ひ所を教へて遣つたりするのに熱心になつて居た。ふと此時に御前の方でけたたましい人聲が起つた。内侍を起したが目を醒さない。恐しい目に合つて居るやうに泣く女の聲がするので、自分はどうしていいか度を失つた。火事が起つたのかと思つて見たがさうでもない。自分は縫物のお師匠さんの女藏人に同行を求めた。

「ともかくも宮様が御殿においでになる時なのです。私達は参つて見なければなりません。」  
と内侍を荒く揺り起して三人が慄へ慄へ、廊下を踏む足の感覚もない程恐がつて藤壺へ参ると裸體の女が二人居た。靱負と小兵部である。それと見て自分達は一層の恐怖に囚へられた。御厨子所に勤めて居る男達も今夜は皆外へ出て居た。宮様附の侍も瀧口の武士も追儼が果てるのと同時に自宅へ歸つてしまつたので、どんなに手を叩いても答へる者が無い。漸く出て來たのはお臺所係りの老女であつた。

「お常御殿へ参つて、兵部の丞と云ふ藏人を呼んでおいで。」



と自分は恥も忘れて知人の名を口づから云つたのであつた。老女は歸つて来てその人の居ないことを報じた。自分は折の悪さが恨めしくてならなかつた。式部の丞輔成が駆け付けて來た。その人は元氣よく一人であるだけの灯に油を注して廻つた。侍女達の中には意識を失つた人のやうに、唯だ目だけを向側の人と見合せたまま呆として居るものもあつた。陛下からお訪ねの使が参つたりした。どんなにこの晩と云ふものが自分に恐しかつたか知れない。陛下は納殿にしまはれた物の中からお出させになつて、盗人に逢つた二人の侍女へ衣服を下賜遊ばされた。其人人の春著に盗人は手を附けなかつたので、朔日の朝の二人はさり氣ない風をして居た。併し自分はその人人の裸體だつた時の幻影をその人人から離すことが容易に出来なかつた。自分を見る度に恐しさが更に呼び起されて、可笑しかつたと評し去つてしまふことも出来ずに、めでたい元日に怖えた昨夜の話を朋輩としないわけにはゆかなかつた。

一月一日はあやにくな坎日であつたために若宮のお戴餅のお式は三日に延ばされたのであつた。今年の正月の御前まかなひは大納言さんであつた。その人は朔日に紅の上に赤紫を襲ねて赤地の唐衣に、白抜模様の裳を著けて居た。二日には紅梅色の厚織物の上著に紫の練絹を下へ

著て青色の唐衣と彩色染の裳を著けて居た。三日は支那綸子の櫻襲ね、唐衣は臙脂色の厚織物、練絹の服は濃紫を著る日には紅を下にし、紅を著る日には紫を下にして居たことは常例で云ふまでもないことである。私達は萌黄、臙脂色、濃い黄色、薄い黄色、紅梅色、薄紫などと云ふ始終用ひる色を一人が同じ色で六枚づつ程襲ねて、上著にもその色を著て、それぞれ配色のいい色を隣にして並んで侍して居た。

宰相さんがお守刀を持つて、殿様がお戴餅のために清涼殿へ若宮様をお抱きしておいでになる直ぐ後にお供した。紅の三重機の織物、同じ色の五重機、また三重機、五重機と云ふやうに襲ね、同じ色の絹をまた單衣、糊打絹を幾枚も一つ隔にその下へ重ね、五重機の堅紋織の赤紫の桂を著て居た。その上に赤の唐衣を著て羅を三枚襲ねて仕立てた裳を著けた宰相さんは支那風の多く加味された姿であると思はれた。單衣に置いた刺繡の模様などが最もさう云ふ感じをさせた。美しい髪は添毛に繕はれて一層見事に見えた。全體の形、身のこなしは更に完全な人と云つていいのであつた。背がいい加減に高く、肉附もふつくらとして、顔は永く見て居る程美しくなつて來ると云ふ質の人である。大納言さんは小柄な人であるが色が白くて、快い



程に肉附のいい顔は背までもすらりと高い人のやうにして見せた。身丈に三寸程餘つた髪の毛の裾にも類の少ない美しくさが味はれた。顔だちには貴婦人らしい威容や身のこなしには弱弱しい美しくさがあつた。宣旨さんは華やかな人で、瘦せた身體の背は高かつた。一筋一筋が美しくいと見える程の髪で、普通の人に比べて一尺程も長い。敬意が思はず拂はれる程の限りない品位を備へて居た。この人の姿が几帳の蔭から顯はれた時、かうして居る自分はこの人の目にどう映るであらうと氣が使はれてならなかつた。眞の美人と云ふのは宣旨さんのやうなもの云ふのであらうと自分は思ひ、その人の性格、人への交際ひやうに缺目と云ふものないことも思はずには居られなかつた。

此處まで書いた筆の序に朋輩達の風采のことを書いたなら、謹み深くない女と云ふものに自分になつてしまふであらうか。けれど自分は唯思ひ出したことを書かうとするだけで現在の批評をするのではない。自分が特に親しくする人のことは書くに憚られるから書かない。また少しでも善くないことを云はなければならぬ人のことも書かないつもりである。

宰相さんと云ふのは北野の三位さんのお嬢さんである。ふつくらとしたその全體の感じの愛

くるしくて才女らしく思はれる此人は、坐つて居るのを離れて見るよりも、近くへ寄つてつづくつと見て居る時に美を多く感受させた。品のよさもさうすればする程勝つて見えた。この人の云ふことには人から敬意を拂はすことも、花やかさに人を酔はすこともあつた。身のこなしに眩い美しさを感じさせるのもこの人である。人柄も批難する所がない。氣のいい人で、そして犯し難い威嚴のあるやうな性格である。小少將さんは何處と云ふことなしに美しく艶な人である。二月頃のしだれ柳のやうである。姿が實によく、身のこなしも心憎い程いい。そして自身の意志などと云ふものは全でないと云ふ風に見えるまでのおとなしい人である。羞恥心が強くて餘り見苦しいと思はれるまでうひうひしい。若し善くない人がこの人をいぢめようとかかつたり、意地の悪い交際ひやうをして蔭口を云ひ廣めたりすることがあつたら、この人はそれが原因で死んでしまひさうに見える人である。若い女性の柔味を最も多く備へたやうな人であるだけ餘りに頼りない氣もされるのであつた。宮の内侍もまた美人である。背丈の高くもなく低くもない人で、坐つた形に立派な程の大きさの見える、そして近代的な感じのする人である。顔の何處が取り立てて好いとも思はれないで居て、そして非常に美しい。娘らしいのも



この人の特色である。中高な顔の色は群を抜いて白い。頭の形、毛の生えやうにも何と云ふ綺麗な人であらうと思はせる所があつた。華やかに愛嬌の多い女性で、總てに互つて少しもそののない人、其上氣取つたやうな所は少しもない。この人の性行は實際一つ一つが人の手本になると思はれるのであつた。式部さんと云ふのはこの人の妹である。ふつくらとし過ぎた程肥えた色白な人である。非常に品の好い顔で、髪も美しい。併し長い髪とは云へない。實家から出て來る時には何時も添毛をしてゐた。目と額が殊に秀麗であつた。笑つた時に見える愛嬌も多かつた。若い人の中で美人と思はれるのは小大輔と源式部である。小大輔は小柄な當世風の女で、髪が見事である。舊は非常に多くて背よりも一尺程長かつたのであるが、この頃は少し減つた。顔容もきりりとして居て、誰からもあま美しいと思はれる人で、此人の容貌にはこの上加へなければならぬものは何もない。源式部は背のすらりとした人で、顔容は見れば見る程愛らしさの加はる顔である。全體がさつぱりとして居て、宮仕女と云ふよりも秘藏娘として育てられて居るお嬢さんらしい所が多い。小兵衛の尉も美しい人である。此等の多くは若い殿上役人が相手とするのに見逃さない女達である。誰も迂濶なことをして居ては情人との關係

が朋輩の中へ充滿に知れ渡るが、巧に上手に秘密を保つて行かうと努力して居ればさうした間柄も知れずに濟んで行くのである。宮城の侍従と云ふ人はその顔容が隅隅まで趣のある美貌で背も小さく痩せても居たから、まだ當分童女として眺めて居たい氣のした人であつたが、自分から進んで老けてしまつた。その上宮仕へも退いてしまつた。背丈より少し長く、袴の裾の方へ曲がつたその髪の裾を派手に切り揃へてあつたのがお勤めに來て居たその時の最終の姿であつた。その時の顔も好かつた。五節の辨と云ふ人がある。平中納言が養女分にして世話をして居ると云ふ人である。これは繪に描いた女のやうな顔をした人である。額が出て、目尻が下がつて居て、其外にも美しい方へ寄つた處は少いのであるが、眞白な肌と手つき腕つきとに心を引くものがあつた。自分が初めて見た春には、背丈に一尺も餘つた濃い髪と見えた髪が半分になつたかと思はれる程に近頃は少くなつて居る。併し長さは以前よりも増したやうである。小馬と云ふ人は顔の長い人であつた。以前は綺麗な女であつたが、盛りが過ぎて琴柱に膠せねばならぬ日になつて宮仕へを退いてしまつた。容貌の上ではまだ勝れた人は誰誰と名を擧げて書いて置くことも出来るのであるが、人格に就いて語ることはむづかしい。併しそれぞれ特色



があつて、劣等な人格と思はれる女は無い。また勝れて立派な自尊心を持ち、才學も情意も完全に整つた人と云ふのもなかなか無い。善い所のあることを思ふと、あの人もこの人もと皆褒め上げたい氣になつてしまふ。自分はこんなことを書いて眞實に濟まない。

齋院の侍女に中將さんと云ふのがある。この人の噂を始終して聞かせる友を自分は持つて居た。その人の書いた手紙も何通か見せられた。なる程世間で評判する趣味生活をして居る人と云ふだけであつて、自分の外に高い鑑識を備へた女は無く、深い思想のある女も無く、世間の多くの女は心も頭も無い者であると思つて居るやうな所がそれ等の手紙に顯はれて居るのであつた。自分は其儘見て居られないやうな氣になつた。公憤とか云つて無智な人達の騒ぐ、ああ云ふ心持になつて中將と云ふ人を憎く思つた。歌にもせよ、散文にもせよ作の善悪は自分の主の齋院より外に眞の鑑別の出来る人のある筈が無い、天才が生れたなら其れをお見出しになるのは自分の齋院であるなどと書いてある。尤もなことのやうではあるが、齋院から世間へ出た歌などに中宮を繞つた侍女達の作と比べてこの方が勝れて佳いと思はれるやうなものは少い。唯だ齋院と云ふ所は興味が中心になつた生活の行はれて居る所であると云ふことがその作から

推して想像されるくらゐのものである。侍女達と一人づつ並べて優劣を争つたなら、此自分と一所に居る女達に齋院方の勝つことを期することも出来ないであらう。齋院は平生人人が出入りをせぬ所で侍女のあらが見えることも少い。面白い夕月夜、懐しい景色の有明月夜、花を尋ねに行き、杜鵑を聞くために志して行くと、其處には風流好きな齋院がおいでになつて、一體の氣分が俗離れにして居るやうに思はれる處から自然男達の中にゆかしがられるのである。此方は事情が違ふ。彼方は侍女に用らしい用もない所である。宮様が上の御局へお上りになるお送り、殿様の御參殿になる時の御用、上の御局で徹夜して下がることの出来ないやうなことは経験しない所である。忙しいことが無いから唯だ自分一身を立派に磨き上げることが熱心になればいいのである。経験を積んで行けば男を相手にして間違つた云ひ過ぐしなどをするものはなくなつて行く筈である。自分のやうに引込思案の者でも齋院に參つたなら、此處では知らない男と應接をして話をはづませなどしても輕佻な女であると思はれる恐れは無いと氣を許して浮氣らしい女となつて行くであらうと思はれるのであるから、まして若くて容貌にひけめのない人は、お化粧ばかり一所懸命にして男の喜ぶやうなことを云つて面白い思ひをし



ようと願ふやうになる。さうした中の競争の結果自然に劣つた人も居なくなつて居ることであらうと思はれる。然も中宮様の方へと云ふと、今は宮中にも陛下の御寵の分けられる女御もお后も外に無く、向ふの御殿、彼方の御簾際と比較される對象が無いので、お仕へして居る者は男も女も敵愾心などは無くなつて居て、外見などをそれほど氣にせず氣樂にして居る。それに宮様は男との交際に馴れ過ぎることは浮薄なことであると遊ばすのであつたから、少し自重する女達はよくよく心安い人でない限りは外から來た男の話相手などにはなつて居ない。唯だのんきな人、恥しがらない人、浮名と云ふやうな名の立つのに無關心で居られる人、そんな人達は何處の侍女もするやうなことをして居た。唯だ與し易いそんな人が見附かつたためによく遊びに來る男などから、中宮附きの多數の女は引込み思案であると云ふことが云はれ、または淺薄な人達ばかりであると云ふことも云はれるのであらう。公平に見て自分は此處の上中の階級の侍女は餘りに臆病で人との交際を避け過る嫌ひがあると思ふ。これでは立派な侍女が主人の飾りであることが有名無實になつてしまふ、見苦しいことであると思ふ。齋院の中將が攻撃して居る點も其れなのであるが、人と云ふものは然しながら一面だけを見て全體が解るもの

では無い、よくないこともある代りに立派な所もあるやうに出來て居るものなのである。引込み思案は悪いとして、さて若い人でも重味のある女と見られたいばかりに華やかなことを避けてしない傾向のある中で、中年ではしやぐ者があつたなら氣の觸れた者とも見えやう、自分はそんな人が出て來て欲しいと思はない。唯だ全體の人がも少し人情に遠くない風になつて欲しいと思ふのである。宮様の御性格には一點の批をお打ちする處も無い、最高最貴の婦人の典型でおありになるのではあるが、餘りなお内氣から目立つたことは自分からしだすまい、そんなことをして恥をかかない人と云ふものは幾人も無いものであるからと云ふことを深くお信じになつて居るのである。もとよりそれには眞理がある、何かの場合に生中なことで衆目を引くのは頭の働きの鈍いのにままして醜なものである。猶又こんな理由も宮様にはあつた。特に勝れた學問も識見も無い女で、或位置のある人の勢力圈内に幅をきかせて居て、當を得てない警句などを衆人の目の寄る所で得意に發表するやうな人があつた。其時分の宮様はまだ極めてお年若なのであつたが、其人のことを苦苦しいと思召さないでは居られなかつた。それに對する反感から平凡な女が最もいいと思召した。このお好みに子供らしい處の勝つた、人の家の秘藏



娘がよく合つて、そんな人ばかりが集められた。弊と云ふやうなものもまたこれから生じた。自分は觀察して居る。今の宮様はもう物の一端ばかりを見ておいでになる方では無くなつた。廣い意味の善悪に悉く正確な御判断をお下しになることが出来るやうにおなりになつた。御觀察もよく行き届く、御自身の周囲のことを殿上役人等が評して、見馴れて居るせいもあらうが氣の引き立てられるやうなことは一つも無いと思つたり云つたりして居ることも御想像遊ばさないでは無いのである。氣の利いたことを一步取り外した時に悪評を招く例もあるとは云へ、かうまでみじめに皆が引つ込んでしまつて居る現状を少し變へるがいいと宮様はお云ひになるのであるが、人人にはまだ前からの習慣が付きまづ居るのである。また現時の公達と云ふ者はどれも皆不眞面目な方の發展者である。齋院などと云ふやうな處で、月や花を背景にして話すことを風雅な言葉で組み立てることは出来ても、朝夕に來馴れて居る處で侍女の云ふ普通事に趣のある答をしたり、若しくは興味のあることを侍女から云ひ掛けられて相當な言葉を返す者は少なくなつた。であるから交際つても面白くないと云ふ自分の朋輩達もあるが、自分の實驗したことで無いからよく解らない。また男がよく話しに來て、女が少し相手をして居る、

そんなことがあるうち兩者に身體の關係が出来てしまふ。女さへ確りとして居ればそんなことにならないで濟む筈であると自分は思ふ。この弱點があるために立派な女と云ふものは少いと云ふことが定評になつてしまつたのであらう。

素氣なく人に逢はないやうな行爲は必ずしも其人を貴くするものでもない、また羞恥を忘れ男女の別を忘れるやうな行爲はもとよりなすべきことでない。併し時と場合に合せて、ああもしなければならぬ事と、かうもしなければならぬことがあるからむづかしいのである。一例を云ふと中宮大夫が見えて、宮様へ啓上することのある時に、子供らしくやははしいだけの上級侍女はお取次の應接をすることが出来ない。またよし出来てもさうした人を相手に大事なことを述べる氣に大夫さんの方でなれない。言葉を多く知らないと云ふのでもなく、理解が無いからでもなく、唯だ溜らなく恥しいと思ふことが主になつて間違つた取次をするやうなことがあると、もう一度で懲りて、その次には客に語らせないやうな態度を取るのである。これは此宮にお付きして居る女達ばかりの弊であるか無いかは自分には解らない。宮仕へに出た以上はどれ程貴い家の子であつても、皆上に主人を頂いて居る氣になつて居る筈であるのに、上級



の多數の侍女は姫様だった時と同じ心持で今も居るのである。それがさうであるからと云つて下級の者が應接に出ると大夫の大納言さんは感情を害される風であるから、應接の出来る誰彼が實家へ行つて居たり、また部屋に休んで居てもよんどころないことで直ぐに出て來られない時にはお取次をするものが無い。已むを得ず其儘大夫さんがお歸りになるやうになるのである。その外の高官で宮様へよく伺候して啓上することを持つた人達には、どれにも一人の定つた應接人が何時の間にやら出來て居て、折角來ても其人の居ない時にはすごとと歸るのである。そんな人人が中宮の侍女には引込根性の者が多くて仕方がないと歎息を洩らすのは道理なことと思はれる。齋院あたりの人人が輕蔑して見るのもこんなことがあるからであらう。併しながら自分の方には物の優劣を見分ける主人がある、外のは盲目であるのも同然聾であるのも同然であること云ふやうに侮るのはまた餘りな思ひ上りやうである。何事にも人を攻撃するのは樂であるが自身の方を完全にするのはむづかしいと云ふことに齋院の人はまだ氣が附かないで自分より賢い者は無いやうに誹謗の矢を放つのである。淺はかな心をそれだけで十分に見せて居る。その中將と云ふ人の手紙は實際參考に見せて上げたいやうな手紙であつた。或人が隠し

てあつたのを自分の友がそつと借りて來て自分に見せて、そしてまた直ぐ自分から取り返して行つたので其れはかなはない。

和泉式部と云ふ人と自分とは興味ある手紙の交換をよくしたものである。和泉式部には仕方のない放埒な一面はあるが、友人などに對して飾り氣なく書く手紙は、文學者としての素質が十分にある女だけに眞似の出來ない妙味のあるものであつた。傷のない歌を詠むこと、博覽強記であること、主義主張のあること、是等の約束を具備した眞の歌人では無いが、現實を詩化して三十一字にした一首の中に人の心を引く處が必ずあつた。併しこれほどの人でも他人の歌の批難をしたりして居るのを見ると、まだ十分歌と云ふものが解つて居ないらしく思はれる。恐らく才氣に任せて口先で歌を詠むと云ふ方の人らしい。敬意を拂ふべき歌人とは思はれない。丹波守の夫人はこの宮や、殿様の所などでは匡衡衛門と呼ばれて居る。名家の婦人と云ふのは無いが、自重して居る人だけに、歌人らしく亂作はしないが、世間に知れて居る歌は何でもない時の即興の物までが皆非常にいい。それこそ敬意を拂ふのに躊躇しない作が多いのである。どうかすると上二句と下三句が別物にならうとするやうな歌を詠んだり、巧んでした警句



に人を驚かすことを得意になつて居たりする女のあるのを見ると、氣の毒にも思はれ、また憎い様にも思はれる。清少納言と云ふ人は才を鼻に掛けて出過ぎる方の代表的の女であつた。あれほど漢學の素養のあることを自慢にして書いた文章もよく見ればまだ半可通であることが多いのである。この人のやうにわざと個性を人と異つて現はさう、特色を工夫せねばならないと云ふことを主にして思ふやうな人は、其時はいいやうであつても後にきつと飽かれるものである。趣味の生活を偏重する女は、荒涼怪奇な場合にも風流があり、また瑣末な享樂をも追求して捨てず、感情の赴く儘に任せて居るのであるから、自然に輕佻な行爲をすることにもなる。その輕佻なことをした女の果てがよく行くものではない。

自分は過去に何と云ふ一つの長所も無く、さればと云つて未來に希望と慰藉を求めることも出来ない女であるが、併しどうなつてもいいと自暴自棄することだけはしないで居ようと思つて居る。この心が自分には猶残つて居ると見えて、物哀れな秋の夜などに縁の端へ出たなら、月の光にまた以前の悲しかつた思ひ出が新になるであらうと思ひ、女が一人で月を見ると魔に魅られると云ふこともあるから、自分のやうな薄命な者はさうした目に合せられることがある

かも知れないと憚つて、少し奥の方に入つて居るが、併し悲みはやはり悲みとしてそんな時の心を占めて居る。風の涼しい夕方に上手でない琴を一人で弾いては、他で弾く琴の音の主につまされて自身の悲みも更に加はると云ふ詩の句のやうなことを感じる人があるかも知れない、そんなに人の心を搔き亂しては濟まないと思つて止したりする。思へば自分と云ふものは愚直な者であり、また憐れむべき者である。

今自分の居る部屋と云ふのは、黒く煤けた一室で、十三絃の琴と七絃の琴とが時々弾かれるものでありながら、自分の不精から雨の日には氣を附けて琴柱を倒して置けと侍女達に命じることもしないで居るので、塵が充満に積つて居る。琵琶はまた置棚と柱の後へ上の所を突込んだ儘一つは右に倒れ、一つは左に倒れて居る。大きい一揃ひの置棚の上へ隙間なしに置かれてあるのは、一つの方は歌書と小説類の古い本で、もう紙魚の巢のやうになつて居る物ばかりであるから、手に取ると離れ離れになつて散亂する恐れがあつて開いて讀まうとする者も無い。片一方の棚は其處へ漢文の本ばかりを選つて積み重ねた良人が亡くなつてからは、それにも手を觸れる人が別段無くなつた。其中の物を餘りに徒然な時などに一二冊引き出して讀んで居る



と、侍女達が集つて、

「奥様はあしたむづかしい物のお讀めになるのが却て御不幸な原因になるのですよ、女と云ふものは全體云へば漢字で書いた本などを讀んでいいものではありませんよ。昔はお經をさへもそんな理由で不吉だと云つて女には見せなかつたさうですよ。」

こんな蔭口を云ふのが自分の耳に入る。自分は、不吉不吉と云つて何でも氣に掛けてする女は必ず長命でもすることか、世間にはさうでないことが多いでは無いかと云つて遣りたいやうな氣になるのであつたが、それは自分が知つたか振の獨斷であつて、女達の言ふのにも一理がある。世の中の事は人に由つて異ふものである。物を讀むにもそれが得意らしく、華美で、愉快相に見える人もあり、淋しい生活をする人が徒然の紛らはしやうの無いために古い本の中から慰みになりさうな物を出して讀むと云ふやうな同情すべきものもある。佛に仕へるにしても大きやうに念佛を口に唱へて珠數の音を高高と揉み鳴して居ると云ふやうなことは決して懐しく思ふべきものではないのであると、こんなことを思つた。自分の自由にしてよい讀書をすらは自分は侍女達の爲に遠慮しなければならぬのである。まして宮仕に出て居ては云ひたい事が

あつても、云つてはどうなるであらうと先づ其影響ばかりが氣遣はれる。また云つた處で實際自分の云ふことが先方へ徹底しなければ無駄である。人の説を壞すことの好きな、自己を過信した女の前ではうるさくて物を云ふことも厭になる。特に何事にも博く通じて觀察と批評の公平を得る女と云ふものは寡い。多くの女達は自分の狭い考へ許りを固執して、他人の意見は一概に道理の無いことのやうに侮蔑する。さう云ふ女達は自分が強ひて争はないのを見て、心から恥ぢて居るやうに思つて居る。自分はさう云ふ場合にも其人達と猶辛抱して相對して居ねばならなかつたことさへある。あれ程正しい意見を持つて居てさへ却て是を非に言ひ枉げられてしまつたかと思ふと、心の内では少しも其れに服して居るのでは無いが、さう云ふ女達と論じ合ふことが煩はしさに、自分は他から見呆けたやうな人間になつて居るのである。それを人が見て、あなたは斯う云ふ方だとは想像しなかつた、艶な、美人らしくして居る人で、交際ひにくい風な、何時もしんみりとした眞實の調子を見せてくれない人で、小説ばかりを讀んで居て、華やかなことを人に言ひかけたりすることが好きで、なんぞと云ふと思つたことを歌で述べる人で、人を人とも思はず輕蔑するやうな人であらうと、皆が評判して憎んで居たのです、



今あなたを見ると、不思議な程大やうで、そんな人では無い気がすると自分のことを云ふのを聞くと、自分は恥しくなつて、他から與し易い女として輕蔑されて居るのであると思ふ一面に、またさう云はれるのが自分の本懐であるとも思ひ、猶さう思はれたいと云ふことを望みにして日を送つて居る。宮様も、

「おまへには餘り露はな自分と云ふものを見られまいと用意をして居たのだつたけれど、他の者よりも親密になつたのね、おまへとは。」

こんなことを折折仰せになるのであつた。意地の悪い心から表面を優しく見せ、敬して近寄らぬと云ふ風を見せるやうな女にも、自分は其人の内心の憎みを助長させたくないと思つて居る。

すべて女と云ふものは大度を備へて、他人には殊に寛容であり得る人であり、沈着な所が土臺になつて居てこそ、學問も才識も無難に役立つことが出来るのである。またよし浮氣らしい輕佻な事件が其人に起つて來ても、本然の性質に癖が無くて交際ひよい所のある女は憎む氣にならないものである。自分は平凡な人間と一所にされたくないと思ふ氣のある女は、平生の動

作にも一つ一つひねくれた我見を立てて居るから人目を引く。目を附けて居れば屹度言葉の中にも、また傍に居る時のその態度にも、立つて行く後姿にも好くない癖が見出されるものである。言行の一致しなくなつた女と、よく人を攻撃する女の非行とは殊に目と耳が寄るものである。非行があつてもその人が癖の無い人である限りは、そのことに對する批評はなるべくして遣りたくないと友人は皆互に思ひ、その人が困つて居るやうな問題は自分達の同情で救ふことが出來たら救ひたいと思ふくらゐの心にはなるものである。感情を害するやうなことを態にする人と悪事と知りつつ罪を犯す人とは嘲笑してもいいと自分は思ふ。殊勝な善人は他人が自身を憎んでも、猶その人のためになることを考へるであらうが、其處までのことは普通の人には出來るものでない。慈悲深い佛でも佛法を譏る罪を淺いものとは決してお教へにならないのである。ましてこの近代の世の中に生活して居る人間の心に敵意を見せるものの恨めしいのは當然のことであらう。確執の起つた時、自分の方に道理が多いと思はせたい心から、一方に對する罵詈譏を他人に言ひ散らしたり、對座して睨みつけたりする女もあり、そんなことをせず表面だけはこれまで通りにして平和に待遇して居る女もある。人格の高下はそんなことに由



つても解るのである。

左衛門の内侍と云ふ女がある。不思議にも自分に悪感情を持つて居ると云ふことである。自分にはどう云ふ理由か解らない。その人の口から出たと云ふ厭な悪評を随分多く自分は聞いた。陛下が源氏物語を人に讀ませてお聞き遊ばされた時に、

「この作者は日本紀の精神を讀んだ人だ。立派な識見を備へた女らしい。」  
と仰せになられたことに不徹底な解釋を加へて、

「非常な學者ださうですよ。」

と殿上役人などに云ひ觸らして日本紀のお局と云ふ名を自分に附けた。餘りに的確で無さ過ぎることであるから可笑しい。自分の家の侍女達にさへも讀書の氣兼をする自分では無いか。宮廷などで學問のある顔がどうして出來やう。兄の式部丞が子供の時分に史記を習つて居るのを傍で聞き習つて居て、兄のよく覚えなかつたり、忘れて居たりする所を自分が兄に教へるやうなことをしたので、學問好きの父は、

「残念なのはこの子を男の子に生れさせなかつたことだ。自分はこの一事で不幸な人間と云

つていい。」

と常に歎息をした。その時分は自分も得意になつて居たのである。男でも學問自慢の者の末始終は不遇と定つて居ると、こんな事を云はれたために漸く目が覺めた後は、一と云ふ漢字をさへも書くのを憚つた。さうして眞實の無學女になつてしまつて、子供の時に讀んだ書物は自分と交渉の無いもののやうに見て居た。其自分が左衛門の内侍の蔭口のやうなことを知つてからは、此事を聞く女達がまたどんなに自分に反感を持つかも知れないと恥しくて、御前に居る時などはお屏風の繪の讚にした短い詩の句をも何事か解らぬ風をして居たのであるが、宮様が白氏文集の處處をお讀みになつてから、さうした物に興味をお覺えになつて、誰かに習ひたいと云ふ思召があつたため、自分は極めて内内に、侍女達が近い處へ出て居ないひまびまに一年の夏頃から樂府と云ふ書物二巻だけを不確かな講義でお聞かせ申し上げた。全く秘密にして居たことであつた。宮様もこのことを隠しておいでになつたのであるが、陛下もそれとお知りになり、殿様もお悟りなつて、殿様からはその書物を新しく書家に書かせてお差上げになつた。左衛門の内侍は宮様のこの御讀書を知らないに違ひない。知つたならまたどんなに自分が



嘲笑されるか知れない。こんなことを思ふと、個人に餘り多く煩の及ぶ世の中と云ふものが厭でならない。もう自分は人の評判などに構つて居ないことにしよう、人がどう云はうとも斯う云はうとも頓着せずに自分は一心に阿彌陀佛を對象として經を讀む事をしよう。世の中の煩さが少しも自分の心を騒がさなくなつた上なら、聖い宗教生活をするのに躊躇もいらぬ筈である。髪を切つて尼になる事まではしなくてもいい、極樂へ行く用意をしても迎へに雲の來ない間は手持無沙汰であらうと自分は思ふのである。自分の年も佛勤めをするのに適當な程におひおひになつて行く。これよりもつと老い呆けた年頃になつて經を讀み出すことになつたら肉體の億劫さも多いに違ひない。賢明な婦人の眞似をするやうではあるが、こんな風に信仰のことばかりが今では思はれる。尤もこれだけのことを思ふことが出来るのも佛縁があるからである。自分は前生の悪因が思はれるやうなことばかりを今日までに經驗して來たのを考へると、何に就けても悲しまずに居られない。

平生の手紙によつて書かぬ事をいい事、悪い事、世間の事、一身の事も残らず自分は書いてお

目に懸けたいのです。自分のやうな淺はかな女を友人にお持ちになつて居ても、これ迄は斯うした無遠慮な事を自分にされようとは思ひにならなかつたに違ひないと自分は思ひます。併しあなたも御無聊なんぞでせう、無聊さに筆を執つて私の書いた物をお讀みになるのはいいかも知れません。あなたのお思ひになることは自分のやうな無駄の多いものでは無いでせうが、何かまたお書きになつて見せて頂きたいと思つて居ます。御覽になりました後のこの日記は少しでも人に見られたくはありません。自分にはまた斯う云ふ風に書いたものであなたのお目に懸けたいやうな草稿も外に譯山あります。私は此頃反古を皆焼いたり、または雛の家を張るのに使つたりしてしまつたのです。人から貰つた手紙もありません。あればさうした紙の裏へでも其れを清書して差上げたいのですが、仕方ありません。新しい紙へ書くと云ふことはしたくないと、こんななじめなことを自分は思つて居ります。それは儉約から思ふのではありません。此日記もお讀み下さいましたら早くお返し下さい。自分でも讀めないやうな書きやうをした所も、文字の落ちた所もあちこちにあるでせう。そんな處だけはどうぞ飛ばしてお讀み下さい。自分はこの日記を他人に對する不満を書いた處で終りにしましたから、世間に對する執着が深



いやうにも見えるでせうが、それは唯だ偶然に斯うなつたに過ぎないのです。

十一日の未明に宮様は御堂へおいでになるのであつた。お車の陪乗は奥様がなされて、侍女達は庭続きであるから皆池を船で行つた。併し自分は其中に交つて居なかつた。遅れて當日の晩に参つたのであつた。この佛事は私人の家の中の御堂でする式を用ひずに、叡山の寺でする作法で行はれたのである。大懺悔などと云ふこともされた。塔の繪を數多く描く者が勝つ遊びも面白さうに行はれた。高官達は大抵歸つて行つたが、残つた人も少しはあつた。後夜の導師達は話の筋も説きやうも、皆違つたものであつたが、どの僧達の口からも斯うした席に御聽聞においでになる宮様の功德の大きなことが讃へられた。佛事がすつかり終つてから殿上役人等は幾艘かの船に分乘して池へ出て遊んだ。御堂の東の端の北向に開けられてある戸の前には池へ下りる階段が造られてあつて、其欄干に中宮大夫が寄り掛つて居た。丁度正式に殿様が御前へ伺候しておいでになつた時で、宰相さんなどの侍女達は御前であるから崩れない姿で集つて話などをして居た。此御堂の内部の光景も外の趣も極めて美しい。朧月が出て若い公達等は

今様歌を歌つた。最初我勝ちに乗らうとした時の落伍者も多かつたが、乗りおほせたのは皆若くて併せて美しい人であつたと云ふことを此歌聲が思はせた。其中に唯だ一人老人の正光大藏卿が交つて居た。さすがに歌ふ仲間になるのは恥しいのか、目立たないやうにして坐つて居るらしい後姿が可笑しいので、御簾の中に居る女達は忍び笑ひをした。不死の薬を探りに行く人もまだ船の中では老體が心細かつたと、自分がこんな意味の獨語を云つて居るのをお聞きになつたのか、大夫は「徐福文成誑誕多」とお口誦みになつた。聲もその姿態も非常に華やかに思はれた。「池のうきくさ」と云ふ今様に笛などを吹き合せて居る聲を送る夜明近い風も懐しく思はれた。一寸したことも背景になつて居ることと其場合とで非常に身に沁むことのやうにも思はれるのである。

源氏物語が御前に置かれてあつた時においでになつた殿様は、それを手に取つて御覽になりながら、例の御戯談をお言ひになるのであつた。梅の枝の下に敷いてあつた紙へ、

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ



と書いて自分へお見せになつた。

人にまだ折られぬものを誰か此すき物ぞとは口馴らしけん

「怪しからぬことで御座います。」

と自分は申した。

繋ぎ御殿の部屋で寝た夜に、戸を叩く人があるとは知つて居たが、恐ろしさに自分は中に居るやうな音もさせずに、じつと夜の明けるのを待つた。翌朝早く、

夜もすがら水鶏よりけに泣く泣くぞ真木の戸口に叩きわびつる

こんな歌を自分は贈られた。返歌、

常ならじと許り叩く水鶏ゆゑ開けては如何に悔しからまし

今年の正月は三日まで日日戴餅に若宮様方を清涼殿へお伴れ申し上げるのであつた。お供に

は上級の侍女も皆参つた。若様の左衛門督さんが若宮をお抱きして、祝のお餅は殿様から陛下へお手渡し申上げるのであつた。二間と云はれるお座敷で、陛下が東の庭の方をお向き遊ばれて若宮へお頂かせになるのである。お上りの時もお下りの時も華麗な光景であつた。中宮様はお上りにならなかつた。

今年の朔日の御前まかなひは宰相さんであつた。この時の晴著の好みは何時もより殊に美しく思はれた。女藏人の役は並の命婦が勤めた。髪を結び上げて居るために、まかなひは常と變つた顔立ちに見えた。三日間に分けてさし上げる御薬掛りの女官は文章博士でもあるやうにすばらしく威張つて居た。

二日に薬の胡莖蓮が人人へ配布されることは、これも例年あることである。二日にある筈の中宮の大饗宴が御中止になつたので、唯だ新年の臨時接待のことだけが藤壺の東面の座敷の中仕切を例のやうに取拂つて行はれた。道綱大納言、實資右大將、齊信中宮大夫、公任大納言、隆實權中納言、行成侍從中納言、頼通左衛門督、有國参議、正光大藏卿、實成左兵衛督、頼定参議、これだけの高官は向ひ合つて席に着いて居た。俊賢中納言と右兵衛督及び左右の参議中



將は下段の室の殿上役人の席の處に坐つて居た。殿様が第二の皇子殿下をお抱き申してお出になり、殿下から御挨拶のお言葉が皆に下された。その後で殿様はお可愛くてならないと云ふ風に殿下をあやし奉つておいでになつた。

「末宮様をこれからお抱き申さう。」

と奥様にお云ひになると、殿下は、

「いけない。」

とお怒りになつた。このことが來賓の中に披露されると、右大將などは非常に面白がつた。人人は直ぐにまた清涼殿へ參つた。そして陛下が出御遊ばされて管絃の御遊があつた。

殿様は例のやうにお酔ひになつた。また困らせられるやうなことになるはしないかと自分は隠れて居たのであつた。

「何故今日早くあなたのお父様は退出したのだ。お上で召しておいでになるのに歸つてしまつた。僻んで居る。」

などと機嫌を悪くおしになつて、

「その代りに歌を一つ作れ、親の代りにそれくらゐのことをするのは當前のことだ。」

とお責めになつた。かうされて歌を作るのは賞められたことではない、自分は作るに忍びないと思つた。殿様は非常に御醜酌になつて居るので血が上つて一層皮膚がお美しく見える。火影においでになるのが誠に華やかである。

「長い間宮様は石女でおいでになつたから、淋しい物足りないことだと拜見して居た處が、今度はこの通りに、どうすればいいかと思ふ程右左に若宮を拜見することになつた。嬉しいことでは無いか。」

かう云つて、お寝みになつた皇子様方のお掛衣を引き開けて眺めておいでになつた。「子の日する野邊に小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし」と云ふ古歌を殿様はお口誦みになつた。新しい作を聞くよりも此折からによく適した賀の歌がどんなにいい感じのものであつたか知れない。

次の日の夕方に、もう春らしく霞んで來たやうな空が、前には大きい建物があつて、唯だ繋ぎ御殿の屋根の上だけに少し見られるのを眺めながら、自分は中務の乳母と殿様の昨夜のお口



誦みを賞め合つた。このお乳母の命婦は何事にも理解を持つた學識のある人である。

自分は實家へ行く許しを頂いて歸つて居たが、一月十五日の第三皇子殿下の五十日のお祝の日の夜明に御所へ參つた。小少將さんは明るくなつてから來た。小少將さんと自分は二人分の部屋を一つにして居るので、一人が實家へ行つて居る時もお互に構はず部屋を使ひ合つた。一所に參つて居る時には几帳を中隔てにして居るのである。殿様がこの部屋へお出でになつた。

「あなた達はどうか云ふ相手か知らぬが戀人を作つたさうだ。」

と云ふやうな恥しいことをお云ひになつたが、二人とも事實で無いことを知り合つて居るので平氣で居た。

十時頃に御前へ出た。小少將さんは薄色の厚織物の袷に赤い唐衣を着て例の置模様の裳を着けて居た。紅梅色の襲ね、萌黄の上着、柳色の唐衣、こんな物も、置模様の華美過ぎた裳なども、若い小少將さんと取り變へたらいいやうなのを此日の自分は着けた。十七人の女官が宮様の御殿へ參つて居た。殿下の御前まかなひは橘三位であつた。御配膳をする三人の兩端は小大夫と式部で、眞中が小少將である。御帳臺には陛下と後の宮お二方がおはしますのである。朝

日の光も射して眩いまで晴れがましく思はれる式場であつた。陛下はお直衣、小口をお召しになり、宮様は例のやうに紅のお召、紅梅、萌黄、柳、山吹の襲つた上に赤紫の厚織物をお召しになり、表に白を使つた柳襲ねのお小袷の模様も色も華やかなのを御着用遊ばされた。式場の傍は晴れがましく思はれたので、自分は御帳臺の後の方にそつと一人隠れて居た。中務の乳母が皇子殿下をお抱きして御帳臺の横から南向きに式場へ出た。美くしい容貌、鮮かな姿と云ふやうなものでは無く、こせこせした處の無い大やうな立派な風采で、若宮のお乳母と云ふやうなお役はこの人がしなければならぬ役であると思はせる品格が備つて居た。赤紫の厚織物の小袷に櫻色の唐衣を着て居るのであつた。この日の侍女達の服装は誰彼となく意匠を凝らし盡くした物を用ひて居たが、色の襲ねやうの悪い袖口をした人が丁度御前から下つて來る物を御簾口で取り入れる役に當り、高官達や、殿上役人等に注目されたと云つて、後で宰相さんなどは残念がつて居たやうである。然しその人はそんなに悪い好みのもを用ひて居たのではない。唯だ色の襲ね方が損であつたのである。小大夫は紅を二枚着て上に紅梅色の濃いのと薄いのを五枚襲ねて居たのである。唐衣は櫻色であつた。源式部は濃い紅の上にまた紅梅の綾を



着て居た。上着の厚織物で無いのを悪いと云ふのであらうか、それまでは云はずといふことである。式場へ出て役を勤める人達では無いではないか、取り運びに過ちをしたりすることの無いやうな者や、御簾口でひよつと顔の見えることがあつても見苦しくない者をと、斯うした役をお命じになる方は人選を遊ばされたに違ひない。服質の劣り勝りは批評すべきでは無い。若宮にお餅をさし上げることが済み、そのお食膳が下げられて、中央の室を廻つた御簾が上げられたのであつたが、其隣である中宮様の晝のお居室に重なるやうになつて女官達が並んで居た。陛下のお乳母である三位を初め典侍達も大勢居た。中宮附の若い女達は下段の室、東の縁附座敷の南の襖子を御簾に變へて二室を續けた所に上級の者が居た。大納言さんと少将さんが御帳の東の横の狭い所に居たので自分もそつと其處へ行つた。それから後自分は式場の模様を悉く拜見することが出来た。お倚子などは無くて平敷の御座にまします陛下の御前には多くのお料理が供へてあつた。其等の飾りの美しくしさは云ひ盡すことも出来ない。高官達は縁側に北向きに西を上にして居た。左右の大臣、内大臣、東宮大夫、四條大納言と並んだ其後は自分に見えなかつた。陛下の仰せで管絃の御遊が初まつた。殿上役人はこの御殿の南東に當る細御殿に

侍して居るのであつた。地下は文字通りである。景政、惟風、行能、友雅などが階下で拍子を取り、殿上では公任大納言がその役を勤めて、頭の辨の琵琶、参議左中將の琴その他の合奏があつた。「あなたふと」が歌はれ、次は「むしろ田」、「この殿」などが歌はれた。曲物は「鳥の曲」の破と急の所が奏された。階下でも笛を吹いた。また下の人は歌に間違つた拍子を入れて叱られたりした。それは「伊勢の海」の時であつた。顯光右大臣は、

「和琴が非常にうまい。」

と賞めたり、輿に乗つて戯談を云つたりして居たが、最後に甚しい酔からした失態は見た人の身さへ顛え上るやうなことであつた。中宮様から陛下へお贈りになつた御品は二箱の笛であつたやうである。





印 檢

昭和十三年四月十日印刷  
昭和十三年四月十五日發行

第十八回配本

現代語譯國文學全集第九卷  
平安朝女流日記

定價壹圓八拾錢

著者 與謝野 晶子

發行者 加藤 雄策  
東京市小石川區表町一〇九

印刷者 君島 潔  
東京市小石川區久堅町一〇八

發兌 東京市小石川區表町一〇九  
凡閣

振替東京三六三三九  
電話小石川六六一〇

共同印刷株式會社印刷



1217-20

# 現代語譯文全集

全二十六卷 價壹圓八拾錢

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
保元物語・平治物語 前田 晁	今昔物語 山岸 德平	榮華物語 藤村 作	大鏡 五十嵐 力	平安朝女流日記 與謝野 晶子	土佐日記外二篇 藤村 作	枕草子 玉井 幸助	源氏物語 下窪 田空穂	源氏物語 中與謝野 晶子	源氏物語 上窪 田空穂	竹取物語他二篇 川端 康成	伊勢物語・落窪物語 窪田 空穂	古事記・日本書紀抄 植木直一郎
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
讀本傑作選 永井 荷風	八犬傳 白井 喬二	雨月物語・春雨物語 漆山 又四郎	近松名作集下 河竹 繁俊	近松名作集上 河竹 繁俊	西鶴名作集下 武田 麟太郎	西鶴名作集上 石割 松太郎	徒然草・方丈記 佐藤 春夫	義經記・曾我物語 漆山 又四郎	增鏡岡 一男	太平記 西村 眞次	源平盛衰記 白井 喬二	平家物語 菊池 寛







